

Title	高齢者の活性化を促進する価値共創モデルの提案 ―ア マチュアオーケストラ活動の分析を通して―
Author(s)	藤井, 美樹
Citation	
Issue Date	2015-09
Type	Thesis or Dissertation
Text version	author
URL	http://hdl.handle.net/10119/12940
Rights	
Description	Supervisor: 小坂 満隆, 知識科学研究科, 修士

修 士 論 文

高齢者の活性化を促進する価値共創モデルの提案
—アマチュアオーケストラ活動の分析を通して—

1350355 藤井 美樹

主指導教員	小坂 満隆
審査委員主査	小坂 満隆
審査委員	白肌 邦生
	梅本 勝博
	内平 直志

北陸先端科学技術大学院大学
知識科学研究科

平成 27 年 8 月

目 次

第 1 章 はじめに.....	1
1.1 研究の背景	1
1.1.1 高齢化社会の研究	1
1.1.2 各省の取り組み.....	1
1.1.3 前期高齢者の活性化.....	4
1.2 研究の目的	5
1.2.1 アマチュアオーケストラの活動事例分析と、活性化促進モデルの構築	5
1.2.2 活性化促進モデルの検証.....	5
1.3 リサーチクエスト.....	6
1.4 研究の方法	6
1.4.1 J 管弦楽団の事例分析と活性化モデル構築	6
1.4.2 活性化モデルを用いた分析	7
1.5 論文の構成	7
第 2 章 先行研究レビュー	8
2.1 高齢者の QOL・生きがい	8
2.1.1 QOL の定義・意味合い	8

2.1.2	生きがいの定義と使われ方	10
2.2	動機づけと欲求理論、社会活動、組織行動	13
2.2.1	動機づけと欲求・モチベーション理論	13
2.2.1	社会活動としての組織・集団行動とグループのモチベーション	16
2.3	知識科学とサービス科学	18
2.3.1	暗黙知と SECI モデル	18
2.3.2	リーダーシップ	21
2.3.3	メディエーター	23
2.3.4	サービス科学と価値共創	24
2.4	先行研究のまとめ	26
第 3 章	高齢者の活性化促進モデル	30
3.1	高齢者が活性化している J 管弦楽団の事例	30
3.1.1	J 管弦楽団の活動	30
3.1.2	J 管弦楽団の定期演奏会活動	31
3.1.3	反省会の場合	31
3.2	仮説構築	32
3.2.1	定期演奏会・反省会の場合から J 管弦楽団の活動を考える	32
3.2.2	仮説モデル構築	32
3.3	仮説検証	33
3.3.1	インタビュー	33
3.3.2	アンケート結果	35

3.3.3 アンケート結果の検証	42
3.4 考察	43
3.4.1 アマチュアオーケストラ活動における「活性化促進モデル」提示	43
3.4.2 J管弦楽団事例のまとめ	44
第 4 章 活性化促進モデル検証と価値共創モデル	46
4.1 高齢者のコミュニティ活動事例	46
4.1.1 A町老人クラブ：自主的なボランティア活動	46
4.1.2 B町地区交流センター：レクリエーション主体のデイサービス活動	50
4.1.3 C区歌声サロン：住民互助としての“ふれあいいきいきサロン”	54
4.2 データ収集と検証	58
4.2.1 指導者・まとめ役へのインタビュー	58
4.2.2 インタビューの検証	59
4.3 高齢者のモチベーションとスキル	60
4.3.1 個人活動と分類	60
4.3.2 指導者・まとめ役の有無と高齢者の活動	62
4.4 考察	63
4.4.1 活動における成果の役割（発表か勝敗か）	63
4.4.2 スキルとモチベーションーオーケストラ活動と比較して	64
4.4.3 指導者(リーダー)と、まとめ役(メディエーター)	65
4.4.4 活性化モデルと価値共創の議論	65
第 5 章 ま と め	67

5.1	リサーチクエスチョンに対する回答	67
5.1.1	サブシディアリー・リサーチ・クエスチョン(SRQ)への回答	67
5.1.2	メジャー・リサーチ・クエスチョン(MRQ)への回答	69
5.2	研究の含意	70
5.2.1	理論的含意	70
5.2.2	実務的含意	71
5.3	将来研究への示唆	72
5.4	結語	72
参 考 文 献		75
発 表 論 文		78
資 料		79

目 次

図 2-1 欲求の階層「マズローの心理学」フランク・ゴーブル著, 小口忠彦監訳 (1972)産業能率大学出版部 P83 より引用	15
図 2-2 集団の要件「組織行動研究の展開」上田奏(2003) 白桃書房 P172 より引 用.....	16
図 2-3 4つの知識変換モード「知識創造企業」野中・竹内(1996) 東洋経済新報 社 P93 より引用	19
図 2-4 知のピラミッド「ナレッジマネジメント:最近の理解と動向」梅本(2012) P276 より引用	20
図 2-5 本研究における、先行研究の位置づけ	26
図 3-1 アマチュアオーケストラ活動の仮説モデル	33
図 3-2 楽器を習得した年齢	36
図 3-3 習得した楽器と現在のパート	36
図 3-4 入団理由	36
図 3-5 よく出かけるもの(他の趣味)	37
図 3-6 オーケストラ活動の優先度	37
図 3-7 生活のハリについて	38
図 3-8 今季演奏会の満足度	38
図 3-9 演奏会の満足度(自由記述)	39
図 3-10 重要度:音楽技術の向上	39
図 3-11 重要度:団員・指揮者とのコミュニケーション	40
図 3-12 重要度:団員・指揮者との一体	40
図 3-13 重要度:聴衆との一体感	41
図 3-14 個人での優先度が高いもの	41

図 3-15	個人での優先度が低いもの	41
図 3-16	アマチュアオーケストラの活動が盛んになるために必要なこと(自由記述)	42
図 3-17	個人のモチベーションとスキル	43
図 3-18	グループのモチベーションとスキル	43
図 3-19	アマチュアオーケストラの「活性化促進モデル」	44
図 4-1	A 町の活性化促進モデル	49
図 4-2	B 町の活性化促進モデル	53
図 4-3	C 区歌声サロン(発表前)	57
図 4-4	C 区歌声サロン(発表後)の活性化促進モデル	57
図 4-5	個人活動型	60
図 4-6	習い事型	61
図 4-7	老人会型	61
図 4-8	サロン型	61
図 4-9	指導者・まとめ役の有無と、高齢者の活動分類	62
図 4-10	活動の発表・表彰と、指導者・まとめ役の関わり	64
図 5-1	価値共創モデル	71

表 目 次

表 4-1 「リーダーとして」指導者・まとめ役への 7 つのインタビュー	59
--	----

第 1 章

はじめに

1.1 研究の背景

1.1.1 高齢化社会の研究

現在、日本は歴史上経験のない速さで高齢化が進み、「超高齢化社会」を迎えつつある。高齢化研究を 2 つに分けた時、医療介護や福祉など主に生活支援を必要とする後期高齢者対象の研究と、65 歳からの前期高齢者が元気に生きがいを持って活動し、さらに活性化して健康寿命を延ばす研究がある。前者は医療・福祉・地域連携などの分野でも研究が進んでいるが、後者の元気な前期高齢者を対象とした分析は少ない。第 1 次ベビーブームを築いた「団塊の世代」が 75 歳の後期高齢者を迎える「2025 年問題」も社会的に注目されており、前期高齢者がどのように社会生活を充実させるかが重要な課題である。そこでリタイア後の長い人生を健康で生きがいを持って過ごす「活性化モデル」を構築する必要がある。

1.1.2 各省の取り組み

日本人の平均寿命が 80 才を超える世界最高水準である現在、内閣府、文部科学省、厚生労働省など各省でも「高齢期における健康や生きがい」を軸に、社会の支えとしての「地域力」「仲間力」、コミュニティでの「地縁」や「互助」といった高齢社会に対する取り組みを始めている。

(A)厚生労働省は、平成 26 年 1 月第 186 回通常国会において「地域における医療及び

介護の総合的な確保を推進するための関係法律の整備等に関する法律案」（医療介護総合確保推進法案）を提出、同年6月18日に成立した。

<http://www.mhlw.go.jp/topics/bukyoku/soumu/houritu/186.html>

“介護認定に至らない高齢者が自立意欲向上を目的とした多様なサービスを受けるためにNPOや民間企業、ボランティア団体など地域の主体を活用する「地域包括ケアシステム」”

この構築が大きな改革となっている。

http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/index.html

地域包括ケアシステムの目的は2つあり、高齢社会の「介護」「医療」「予防」サービスと、「住まい」「生活福祉支援サービス」の「5つの構成要素」が連携し地域包括センターと一体的に提供するものと、予防給付を地域支援事業に移行するにあたり各費用負担の配分に関わる「自助・互助・共助・公助」という考え方が示されている。

「自らの健康管理・自分のことを自分でする自助」「介護保険など社会保険制度及びサービスを利用できる共助」「高齢者福祉事業や生活保護など公的援助の公助」に加えて「ボランティアや住民組織の互助」という「費用負担が制度的に裏付けられていない自発的なもの」がある。この「自助と互助」の概念・役割への取り組みが今後の少子高齢化の新しい形とされており、前期高齢者が生きがいを持ち活動する取り組みにつながる。

(B)内閣府(平成24年)「高齢社会対策大綱」社会参加・学習等分野に係る基本的施策では、「生きがい」「自己実現」「学習」といった内面的な充実と高齢者の社会参加促進、それらを実現するための「地域貢献」など互助意識の促進も見られる。

<http://www8.cao.go.jp/kourei/measure/taikou/h24/2-3.html>

“高齢社会においては、価値観が多様化する中で、社会参加活動や学習活動を通じての心の豊かさや生きがいの充足の機会が求められる”

“高齢者が年齢や性別にとらわれることなく、他の世代とともに社会の重要な一員として、生きがいを持って活躍したり、学習成果を活かしたりできるよう、ボランティア活動を始めとする高齢者の社会参加活動を促進する”

“社会参加の機会は、自己実現への欲求及び地域社会への参加意欲を充足させるとともに、福祉に厚みを加えるなど地域社会に貢献し、世代間、世代内の人々の交流を

深めて世代間交流や相互扶助の意識を醸成する”

(C)内閣府(平成 26 年)「高齢社会白書」に記述されている、平成 25 年度 高齢期に向けた「備え」に関する意識調査結果では、高齢期に向けた「備え」に対し、35 才から 65 歳までを対象にした意識調査を実施しており、高齢期前に個人個人で「備え」をしておく重要性が取り上げられている。

<http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h25/kenkyu/gaiyo/index.html>

“高齢者が他の世代とともに社会の重要な一員として、地域の行事や団体への参加、社会活動などの社会参加活動を行うことは、活力ある地域社会の形成にとっても重要である。現役世代には仕事中心の生活を送っている人でも、高齢期には徐々に地域で過ごす時間が多くなる。高齢期において社会参加活動を行いたいと考える人は多いが、現役世代から、仲間づくり、行事・団体等への参加等の「備え」に取り組む人は多くはない。高齢期を健康でいきいきと過ごすためにも社会参加活動は重要であり、個々人の若年期からの取組が必要である。”

(D)文部科学省(平成 24 年)「超高齢化社会における生涯学習の在り方に関する検討会」第 6 回では、生きがいが生活の質向上につながるために「備え」の必要性が挙げられている。個人の内面の充実と社会での仲間づくりなど、より具体的な高齢化社会の学びと、社会活動のつながりについて検討した部分を取り上げている。

http://www.mext.go.jp/a_menu/ikusei/koureisha/1317565.htm

“リタイア後の 20 年にも及ぶ人生を、健康で、生きがいをもち、自らが持つ能力を最大限に活用して生きていくための準備が重要となっている。”

“生きがいは、個人の生活の質を高め、人生に喜びをもたらすものであるが、何に生きがいを見いだすかは人それぞれ異なり、多種多様である。趣味や教養のほか、就労、起業、社会貢献、さらには、それらにつながる学習活動も含めあらゆる活動が生きがいになりうる。”

“定年後の生きがいは定年に伴ってすぐに見つかるものではないため、若い時期から高齢期を見越し、学習活動、能力開発、社会貢献など様々な活動に取り組むことを通じて、自ら生きがいを創出していくことが重要である。”

“現役世代から異なる分野の人と積極的に交わり、関係やネットワークを維持する努力を継続することによってはじめて成立するものであり、それが高齢期の孤立を防ぐことにもつながる。”

生涯学習の意義・役割としては、期待するものとして次の2点がある。

“学びの場から生まれる新たな同好の士のネットワークである「地縁」の形成も期待できる”

“生涯学習は生きがいづくりにつながる重要なものであり、生きがいを持つことで、心身ともに健康の保持増進が可能となり、介護予防にもつながることが期待される。”

学習内容と方法の工夫・充実の項では、高齢期の活動内容に「これまでの人生での経験と関係性のある学び」が効果的であることと、「学習成果の社会還元」として学びの循環の構築も必要とされている。

“高齢者には豊かな人生経験があるなど、他の世代とは異なり、独自の学習者特性を有する。例えば、回想法を取り入れた学習、歴史的視点を組み込んだ学習や自己の人生経験と照応しつつ古典や芸術を理解するといった学習が有効である—中略—学習機会の提供にあたっては、これまでのような趣味・教養といった自己完結的な学習だけではなく、学習成果を社会に還元することを視野に入れ、次は自らが教える立場に成ることも考慮した、学びの循環を構築することが必要である。”

1.1.3 前期高齢者の活性化

各省の取り組みからは、高齢者に対し「健康で生きがいを持つ・個人の生活の質」「自己実現への欲求・内面の充実」「自助」といったQOLの向上・生きがい、自己実現・モチベーションを持つことのできる生活と、「社会参加」「地域社会」「ボランティア活動」「相互扶助」「世代間交流」「地縁」など社会での活動の促進、さらにその活動を行うために若年期からの行事参加や技術・学習など事前の「備え」が求められている。学習活動の具体例では経験と結びつく学習と、学習成果を社会還元する循環的な学びの姿勢が推奨されている。

このように前期高齢者が健康で生きがいを持ち、元気に活性化して社会活動を行うことが求められており、高齢者が活性化する活動を明らかにする研究が必要である。

1.2 研究の目的

本研究の目的は、高齢者が活性化する価値共創モデルを作ることである。
このために次の2つの課題を解決する。
アマチュアオーケストラの活動で事例分析を行い、活性化モデルを構築する。
他の活性化している活動においても活性化の事例分析を行い、モデルの検証を行う。

1.2.1 アマチュアオーケストラの活動事例分析と、活性化促進モデルの構築

高齢者が団員としていきいきと活動しているアマチュアオーケストラの活動の事例を分析し、高齢者のコミュニティ活動における活性化、QOL(Quality of Life)向上を促進する理論モデルを提案する。クラシックの愛好者は、比較的高年齢者が多く、音楽は長く活動が可能である。高齢者が社会活動を行う「場の1つ」として、アマチュアオーケストラ団員が自らの生活における充実度をどのように構築しているか、スキル向上を目指すモチベーションは個人と団体で異なるのか、さらに団員間、指導者・まとめ役の共創にも着目し、高齢者のQOL向上との関係を議論する。

次に、高齢者のオーケストラ活動が、各省が目指す高齢社会の取り組みに該当しているか検証を行う。

1.2.2 活性化促進モデルの検証

オーケストラ活動の分析で得た活性化モデルを用いて、他の活性化している高齢者の活動においても事例分析を行い、活性化促進モデルは同様に成り立つか検証する。

本研究においては、音楽活動の事例で活性化する高齢者のQOLの関係を論じ、活性化促進モデルを構築する。構築した活性化モデルを用いて他事例において検証、活性化促進モデルが価値共創を行うモデルであると提案することを、研究目的とする。

1.3 リサーチクエスチョン

本研究では以下のようにリサーチクエスチョンを設定した。

メジャー・リサーチ・クエスチョン(MRQ)：

高齢者の活性化促進に結びつく価値共創モデルとは、どのようなものか？

サブシディアリー・リサーチ・クエスチョン(SRQ)

SRQ1：高齢者の社会活動が持続・活性化するには、どのような価値共創の場が必要か？

SRQ2：価値共創の場において、高齢者の技術向上は、いかにモチベーションに結びつくか？

SRQ3：高齢者の社会活動を持続・活性化させるために、メディエーターの果たす役割は何か？

1.4 研究の方法

1.4.1 J 管弦楽団の事例分析と活性化モデル構築

J 管弦楽団の演奏活動に同行し、データ収集から事例分析を行う。データ収集・分析の方法として、団員へのアンケートと、指揮者と演奏者(団員)へのインタビューを行う。

演奏会に至る練習のプロセスの中で、指揮者・演奏者の知識創造・知識共有の場について観察、活性化する活動の検証を行い、その中で個々の技術の向上と団体(グループ)の技術向上は、社会活動の中でモチベーションと成り得るか明らかにする。そして活動の中で団員間・指揮者・団長の3者の関わりを通して生まれる“良い演奏”が高齢者個人のスキル向上に対するモチベーションをあげ、健康で活気のある個人のQOLに繋がることを示す「活性化モデル」の提案を行う。

1.4.2 活性化モデルを用いた分析

A 町老人クラブのボランティア活動、B 町地区交流センターのデイサービス活動、C 区歌声サロンの活動に対しても、それぞれ同行・見学を行い、3 つの活動事例の観察と指導者・リーダーへのインタビューから、アマチュアオーケストラ活動で提案した「活性化モデル」が、各事例に対してどのように当てはまるか検証する。

4 事例を通し、高齢者の社会活動において生き生きと活性化し、持続している場の条件とは何か、個人とグループの技術とモチベーションが活性化になり得るか、リーダー・メディエーターはどのように関わっているのかを考察し、「活性化促進モデル」が価値共創モデルとなることを議論する。

1.5 論文の構成

第 1 章では、研究の背景、研究の目的、リサーチクエスチョン、研究の方法を述べた。

第 2 章では、本研究における高齢者の活性化に関連した、QOL・生きがい・モチベーションなど個人の概念、社会活動・組織活動などの団体としての概念とグループ・モチベーション、関係する知識科学、リーダーシップとメディエーター、サービス科学について先行研究をレビューする。

第 3 章では、アマチュアオーケストラ J 管弦楽団活動の事例分析を行う。観察、インタビューとアンケートを通して、高齢者の「活性化促進モデル」を構築し、提示を行う。

第 4 章では、他的高齢者活動として、A 町老人クラブ・B 町地区交流センター・C 区歌声サロンの 3 事例について事例分析を行い、活性化促進モデルとの比較・検証を行う。

活性化している場の分析、リーダー・メディエーターの関わりについても検証を行い、「活性化促進モデル」は価値共創モデルであることを議論する。

第 5 章では、本研究の結論についてリサーチクエスチョンに対する回答と、理論的含意、実践的含意について述べる。

第 2 章

先行研究レビュー

高齢者が元気に生き生きと活動を行う中で必要となる考え方・行動と、活性化促進モデルの構築に必要な先行研究レビューを行う。

2.1 高齢者の QOL・生きがい

高齢者が生きがいを持ち活動するために、まず Quality of Life (QOL) と生きがいの関係について考える必要がある。QOL・生きがいの言葉は、ともに医療文献・医療現場で患者の治療、心理的ケアに対しても多く用いられている。超高齢化社会を迎え、健康な高齢者と QOL・生きがいの関わりについて先行文献レビューを行った。

2.1.1 QOL の定義・意味合い

Quality of Life (QOL) について藤井(2000)は、病を持つ者のケアから論じている。“QOL は、「いかに長く生きるか」ということより、「いかに人間の尊厳を保ち豊かに生きるか」という人間の生き方や命の質 (quality) を問題にする概念”としている。

“過去 20 年の様々な QOL 研究の中で、QOL 概念については次の 2 つの点でコンセンサスが得られている。一つは、QOL は生活のあらゆる領域を含む概念—中略—全体としての人、生活の全てに関わる概念であるということである。もう一つは、QOL は主観的概念であるという点である。—中略—QOL を問題とする本人のみが評価でき

るものであるということである。”

また下妻(2008)は、医療現場から見た QOL の解釈と提案について述べている。

“実際のところ、QOL という言葉の適切な日本語訳が未だ定まっていない。「生活・生命の質」あるいはそのまま「クオリティ・オブ・ライフ」で定着している感がある。医療における QOL には多要素性と主観性という 2 つの特徴を有する。前者は、健康関連 QOL が身体面・心理面・役割機能面・社会面など多数の要素を含み、WHO で定義される「健康とは、身体的、心理的、社会的にとっても良好で安定した状態であり、単に病気がなかったり、病弱でないことではない。」とする健康の定義を具現化する構造となっている。後者は、QOL が医師・第三者の客観的評価ではなく、あくまで患者の主観的指標を用いた評価であることを示している。”

中西ら(2003)は、QOL 概念の変遷について産業革命からの歴史的な流れを追っている。

“QOL は個人の期待と現実の生活の差に依存したものと見なされる。19 世紀半ばのイギリスは、生活革命の波及によって高い期待や欲求を植え付けられながら、環境汚染と貧困という現実とのギャップに喘いだ。しかし、その結果として公衆衛生法や住居法、および都市・田園計画法などの環境改善のための法制度の急速な整備がもたらされたことも事実である。”

“QOL 概念は歴史的には基本的な居住環境をめぐる問題意識から生まれたが、近年ではより包括的な概念として形成されてきている。”

“QOL が医療分野において確固たる位置付けを占めるに至った時代背景は、社会資本整備をめぐる近年の状況と酷似している。その一方で、社会資本整備や空間整備に関わる QOL の議論はまだまだ乏しいと言わざるを得ない。”

尾崎ら(2003)は、100 歳以上の高齢者に聞き取り調査を行い QOL について分析している。

“QOL の高い百寿者の特徴は、男性では、①運動習慣がある②身体機能としての視力が保持されている③普通のかたさの食事が食べられる、女性では①運動習慣がある②身体機能としての視力が保持されている③自分から定時に目覚める④食事を自らすすんで食べる(食欲がある)、⑤同居の家族がいること、が明らかになった。これらの要因の維持が超高齢者の高い QOL の実現に関与している可能性が示唆された。”

“高齢期以降も運動習慣を継続していることは超高齢期において高い QOL を維持するための重要な要因である可能性が考えられる。”

QOL は環境や身体・健康など何らかの問題意識がある時にこそ、個人の主観によって、より一層の価値が見出される。高齢世代になると、誰もが次第に若年期と異なる身体や健康の変化に不安を感じるようになってくる。リタイア後もなお元気で生き生きと過ごすためには個人個人が健康に注意をはらい、QOL の向上を自ら主観的に認識できる社会生活を送ることが、高齢期の活性化へと繋がる。

2.1.2 生きがいの定義と使われ方

「高齢者の生きがい」という言葉は、近年よく使われるようになった。「生きがい」は「生き甲斐」「生きている甲斐」がルーツであるが、高齢者にとっての「生きがい」とはどのようなものであるか、先行文献レビューを行った。

神田(2011)は、明治から太平洋戦争までの「生きがい」の用いられ方について国語辞典・新聞・小説などの文芸・その他出版物のそれぞれから、分野別に調査し「生きがい論」のブームとなった 1960 - 1970 年代に着目している。

“第 2 次世界大戦の敗戦後しばらくはほとんどの国民が生活を維持することに追われ「生きがい」に思い至ることが生じにくかった。それが高度経済成長の流れに入ることにより人々が自身について考えるゆとりが生じたこと、その一方で技術革新によって個々人の人間性がそこなわれる、つまり疎外状況が自覚され、「生きがい」が問われるようになったことにあるとされる—中略—1960 年代と 1970 年代を境に生きがいをタイトルに含む書籍は大幅に増えている。なお 1960 年代に出版された 28 点のうち 25 点は 1966 年以降に出版されたものであり、「生きがい論」ブームの始まりとされる時期と重なっている。”

時代背景とともに「生きがい」の使われ方は変化してきていると言える。

ではどのように「高齢者の生きがい」という言葉が定着したのか。生きがい論のブームともなった神谷(1966)の著書「生きがいについて」から引用する。

“同じ条件のなかにもあるひとは生きがいが感じられなくて悩み、あるひとは生きるよろこびにあふれている。このちがいはどこから来るのであろうか。”

“生きがいということばは、日本語だけにあるらしい。こういうことばがあるということは日本人の心の生活のなかで、生きる目的や意味や価値が問題にされて来たことを示すものであろう。”

“もうひとつ生きがいに似たことばに、はりあいというのがある。これも西洋語にな

いようであるが、これは生きがいの一面をよくあらわしていると思う。”

“生きがいということばの使いかたには、ふた通りある。この子は私の生きがいです、などという場合のように生きがいの源泉、または対象となるものを指すときと、生きがいを感じている精神状態を意味するときと、このふたつである。”

神谷は後者の「生きがい」について、生きがいを求める心を次の7つの欲求とした。

□ 生存充実感への欲求

「生きがい感」のもっとも基本的な要素の一つ

生命を前進させるもの、よろこび、勇気、希望 欲求の強さには個人差がある

審美的鑑賞、趣味的活動、日常生活のささやかなよろこび

毎日の生活の中で、とりたてて生きがいと意識されないものもある

□ 変化と成長への欲求

人間を内外への冒険と探究にかりたてる原動力

若い生命のなかの変化と成長への楽しみ（人に限らず動植物も含む）

学問、旅行、登山、冒険、所有物をふやすこと、収集など

経験拡張欲、征服欲、闘争欲の満足も含む

□ 未来性への欲求

現在の幸福より、未来への希望

大きな未来欲求・未来展望が苦難に耐える力となる殉教者など

子孫・民族国家・文化社会・人間の進歩発展に夢を託し、その大きな流れの中に一部としての自己の未来性を感じ、支えにする

種々な生活目標、夢、野心、終末論的な未来

□ 反響への欲求

他者との共同世界における対人的な反響、はりあいも含む

1. 共感や友情、愛の交流

2. 優越または支配によって他人から尊敬、名誉や服従をうけること

3. 服従と奉仕によって他から必要とされること

□ 自由への欲求

自律性の感情、外側と内側 選択しないという不自由さへの欲求

自由への欲求との対極が「安定への欲求」

生存充実感と同じ無償性のものも含む

ひとに作用するものごとや人物、偉人、スター的存在

□ 自己実現への欲求

自我感情、自己の内部に潜む可能性を発揮し自己を伸ばしたい欲求

自己に対して自己を正しく実現しているか

最も個性的な生きがい

ささやかなものでも、その人でなければできないという独自性の創造

□ 意味と価値への欲求

知覚のような生体験の中にすでに未分化な形で含まれている

感情・思考・学習・記憶など生体験のなかにもある

自己の生を正当化する「生肯定的」なもの

自己実現とも密接にあり、報恩・忠節・孝行・人への帰依・信仰も含む

神谷は「新しい生きがいの発見」で次のように述べている。

“いつまでも新しい生きがいが見つからなければ、心の世界はこわれたまま、それなりに虚無とあきらめのなかで、混沌とした世界に低迷しつづけることになる。”

“「ケ・セラ・セラ」、「どうにでもなれ」、「食べることと寝ることが最大のたのしみ」とのべ、毎日の生活について、「時間をつぶすのに苦労している」、「ただ娯楽に費やしている」”

これは愛生園で療養する生活者の調査用紙から得たものであるが、時間をもてあましている健康者にも、観光地の裕福な旅行者の中にも同じ姿が見られることが珍しくないと述べている。神谷は愛生園での患者たちと関わる経験をもとに著書全編を通し、対象・環境を多様な「ひと」に広げ、それぞれの「生きがい」について分類し述べている。「変化への欲求」「未来性への欲求」「反響への欲求」では、他者の客観的な成長を通して、自己の欲求が得られることを見出している。

山下ら(1989)は、在宅老人とホーム老人を対象にアンケート調査を行い、「生きがい感」を「生きる喜び」「生きる張合い」と定義、比較している。

“生きがい感のある人には在宅であれホーム老人であれ、共通した生活態度があることを見出した。すなわち、生きがい感のある人とは打ち込める趣味など楽しみがあり、家庭やホームでの役割に張合いを感じ、過去に比べて現在を幸せに思い、健康状態も比較的良好な人達であり、総じて現在の自分のおかれている立場を楽しみ、幸せに感じて積極的に生きている姿勢がうかがえる人達であった。”

年金シニアプラン総合研究機構の過去 5 回(1991・1996・2001・2006・2011・2013)における、50 才以上の年金受給者に対する全国アンケート調査報告によると、全ての回で生きがいの意味を「生きる喜びや満足感」ととらえた回答が 1 位であった。また、1996 年から後の 4 回では生きがいの対象を質問している。この回答は 4 回を通してトップ 2 が、「趣味」と「子ども・孫・親」という結果であった。神谷が述べた「他者の客観的な成長を通した生きがい」とともに、生存充実感の欲求(審美的鑑賞・スポーツ・趣味的活動)・自己実現の欲求(個性・独自性)が多くの高齢者に「生きがい」と感じられていることを示している。

2.2 動機づけと欲求理論、社会活動、組織行動

高齢者にとっての生きがいを得る行動とは何か。個人の内面的な欲求理論・モチベーションと、コミュニティなどの社会活動から集団として活動する場合の組織行動を先行研究から探る。

2.2.1 動機づけと欲求・モチベーション理論

上田(2003)は、

“目標達成に向かうその人間の努力水準を決める意志ないし心理的プロセスを一般的にモチベーション(motivation)(ないし動機づけ)という。つまり、人間の行動の水準に影響する内的要因としては、能力とモチベーションの両方があるということになる。”

と述べている。そこでマズローの欲求階層説から、動機づけ・モチベーションを考えるとともに階層の高次にある「自己実現」についても考える。

マズロー, 小口訳(1987)人間の動機づけに関する理論「基本的欲求」より

□ 生理的欲求

あらゆる欲求の中で最も優勢なもの

あらゆる欲求が満たされない場合、生理的欲求は顕著に現れ、他のあらゆる欲求は存在しなくなるか、背後に押しやられてしまう

比較的独立した欲求であるが、完全に孤立するわけではなく、他のあらゆる種類の

欲求の「水路」としての役割もはたしている

□ 安全の欲求

平均的な人が予想できる法則性のある組織された世界

子どもが顕著な例とも言える

より高い欲求から安全の欲求へと逆行もある

□ 所属と愛の欲求

家族や家に始まり、集団形成

「群れ」として人間の奥底にある動物的な傾向

□ 承認の欲求

1. 強さ・達成・熟達能力・自信・独立・自由

2. 評判・信望・地位・名声・栄光

他者の正当な尊敬に基づく健全な自尊心

□ 自己実現の欲求

自分に適している自分自身の「本性」に忠実なこと

人により、大きく異なる

自己充足への願望 潜在的に持っているものを実現しようとする傾向

通常、生理的欲求・安全欲求・愛の欲求・承認の欲求が先だって満足された場合、

これを基礎にして出現する

欲求理論で解釈の分かれる、「高次の自己実現欲求」については、

- ・ 高次欲求レベルの生活は有能性が高く、より長寿で健康的であること
- ・ 高次の欲求を満足すると「いっそう望ましい主観的結果」として真の幸福、平静さ、内的生活の豊かさがもたらされる
- ・ 大きな価値を認め、社会的にも好ましく自己実現に近い
- ・ 低次欲求は、それに比べてはるかに部分的で限定
- ・ 鑑賞・楽しみ・驚き・趣などは、動機づけられたものと言うよりは、動機づけられた活動の結果・目的であり、欲求満足に随伴する現象としている。

フランク・ゴープル, 小口監訳(1972)は、このマズローの「欲求階層」をわかりやすく図示し、「高次の欲求」の詳細についても体系化している。図 2-1 に示す。

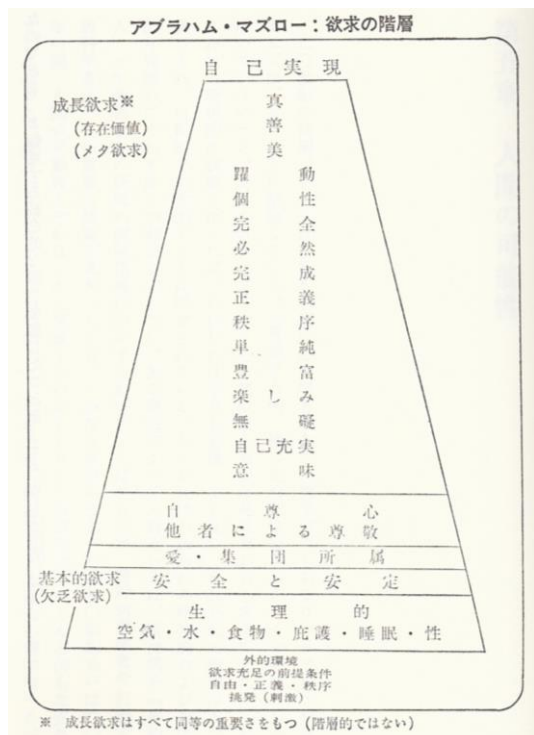


図 2-1 欲求の階層「マズローの心理学」フランク・ゴープル著, 小口忠彦監訳 (1972)
産業能率大学出版部 P83 より引用

佐々木(1996) は生涯学習実践とマズローの欲求理論、神谷の「生きがい」について次のように述べている。

“生涯学習の重要性が語られる際には、現代人が物質的には満たされているにもかかわらず、精神的満足度についてはまだまだ不十分である—中略—高齢者の生きがいづくりという文脈で生涯学習が注目される点に顕著である。”

“マズローは、欲求論を展開しながら、「自己実現」という究極の価値を示しているからである。”

“日本的な言葉である「生きがい」とは、実存欲求にきわめて近い概念であろう。

神谷美恵子は、生きがいという言葉について、“生きがいの源泉、または対象となるものを指すときと、生きがいを感じている精神状態を意味するとき”との二つの場合を分けている。この二分法を筆者なりに解釈し直すと、生きがいには、自分がこれまで生きてきた意味および今後生きていこうとする意味を理解させてくれる理性的側面と、生きている実感を感覚的に味わうというような感覚的側面とがあるということになる。”

2.2.1 社会活動としての組織・集団行動とグループのモチベーション

高齢者が社会活動を行うとき、趣味またはアクティビティなどで何らかの集団に参加する。そこで組織・集団の行動と、そのモチベーションとともに自主的・互助的である「サロン活動」についての文献レビューを行う。

上田(2003)は、組織と集団を次のように述べている。

“組織(organization)とは、複数の人間が共通目的を達成するために集まって行動している社会的システムとして定義できるものである。”

“集団(group)とは、共通の目的を達成すべく互いに相互作用関係を持って行動する複数の人間全体のことである。” 図 2-2 に示す。

集団の要件

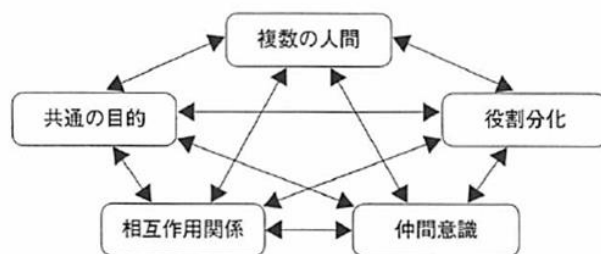


図 2-2 集団の要件「組織行動研究の展開」上田奏(2003) 白桃書房 P172 より引用

また、上田は、観客効果と共行動効果について次のように述べている。

“集団の人間同士は相互作用関係にある。最も単純には、他者がまさに存在するということが影響して、集団構成員が単独で行動するのとは異なる心理的作用をもたらして、その行動が変化するということもあり得る。” “個人の行動が他者（観客）の眼前で行われることによる効果や、自分と同じ行動を同時に遂行している共行動者の存在が傍にあることによる効果に対する注目も、集団行動の特徴を認識するうえでは極めて重要である。”

オーケストラ組織論として山岸（2013）は次のように述べている。

“組織に属して演奏活動をすることそのものが、演奏者のキャリアのみならずモチベーションを満たすことになる。さらに、その組織がよい演奏をできる環境であることが、さらに高次のモチベーションにつながる。”

武脇（2011）は、グループモチベーションについて、次のように述べている。

“グループの意義はメンバー相互の助け合い＝援助行動にある。それゆえに、グルー

プの業績を向上させるには、この援助行動を促進させることが必要である。”

“次にグループの場合は、モチベーションの増加が業績へと至るプロセスが個人の場合と異なる点に注意が必要である。それは、グループと個人レベルの相互作用が生じることである。”

“個人はグループ効力感の影響を受けるため自己とチーム効力感の二重の影響を受けることとなるので、グループ効力感を高めることが予想以上の大きな業績を生み出す要因となりうるということが明らかとなった。”

集団の活動においては、他者からの影響が個人へ相互作用となり、個人の行動や業績、さらには個人のモチベーションにもつながる。

高齢者の具体的な集団活動についても、先行研究したものを挙げる。

老人会とシルバー人材登録者を対象にアンケートを行った長田ら（2010）は、

“QOL 質問票と中程度以上の相関がみられたことにより、社会的活動での経験や継続が対象者の生活や意識に影響を及ぼしている可能性が示唆された。一度始めた社会的活動に対しては、年齢を重ねてもある一定の継続性が見込める”と述べている。

互助活動としての「ふれあい・いきいきサロン」について高野ら（2007）は

“「サロン」活動は、高齢者の介護予防や仲間づくりを目的として、定期的に高齢者が集う場を、歩いていける身近な地域につくり、運営する担い手と参加する高齢者が「気軽に」・「無理なく」・「楽しく」一緒に活動を行うという理念に基づいて展開されている。”

“「サロン」活動は、地域住民に対して、格好の福祉教育の場を提供しているものと思われる。なぜならば、「サロン」活動は、活動の担い手（住民）と参加者（高齢者）とが共同してつくりあげる福祉サービスだからである。担い手は、活動によって得られる参加者との出会いや深い関わりによって、高齢者が抱える生活課題や地域社会の課題について理解を深めていくことになる。そしてそれは、結果的に、担い手自身、及びそのネットワーク上にある他の住民の福祉意識を高めていくことになるだろう。「サロン」活動を通じた気づきや発見の繰り返しが住民相互の見守りや声かけ活動へと発展した事例も少なくないことが、これを証明している。”

と述べている。

また、森（2014）は、サロンについて次のように述べている。

“サロンとは高齢者に対して活動や交流の「場」を提供し、その過程の中で「介護予

防の推進」、「外出機会の向上」、「地域でのつながりの強化」などを目的に活動している。しかしながら、運営はボランティア依存の部分も大きく、担い手・参加者・プログラムの3局面ともにマンネリなどの硬直化に陥りやすい傾向を持つ。またこれらに加え、先行研究では参加者側からの調査が極端に少ないことから、サロンの目的が達成されているかは十分に検討されていない。”

高齢者の社会活動として、多様な趣味・稽古やサークルを除くと、地域密着型の代表的な活動は「老人会」と「サロン」である。本研究では、事例に「老人会」「サロン」を取り上げたことから先行研究レビューに用いた。

2.3 知識科学とサービス科学

高齢者が所属する組織・集団・コミュニティが円滑に活動するためには、活性化できる「場」と、知識移転、それを伝えるリーダーの存在が重要である。知識科学、リーダー、まとめ役としてのメディエーターの先行文献レビューから考える。

2.3.1 暗黙知と SECI モデル

知識科学を進める上で根底となる暗黙知を、まずポラニーの文献から引用する。
マイケル・ポラニー, 佐藤敬三訳 (1980)

“我々は語ることができるより多くのことを知ることができる”

“知識の大部分は言葉におきかえることができない”

“作業をしている人は、身体の一部としての諸動作の中に潜入することによって諸動作を関連づける。一方、観察している人は、外部からそれら諸動作に潜入しようとしてとめることによって、それらを関連づける。彼はそれら諸動作を内面化することにより、それらに潜入する。こうした開拓的な潜入によって、生徒は名人の技能の感覚を会得し、いつしか名人と技を競い合うほどにもなるのである。主観と客観とがこのように構造的に類縁関係にあるということ、そして前者が後者に潜入するということは、身体を用いて技能を習得する場合にだけ起こるのではない。チェスをする人は、名人が行った試合をたどることによって名人の精神に入りこみ、名人が心に秘めていたものを発見しようとする。”

“すでに見てきたように、我々は暗黙的な力によって周囲の世界を解釈するとき、この解釈は、我々の身体が周囲の事物と出会って生じるもろもろの衝撃を、我々が事物の意味として包括することによってなされる。この包括は知的にも実践的にも行われる。そして包括的存在は、自分自身の行う技能はもちろん、他人の行う技能や他人そのものまでをも含むようにその範囲が拡張された。”

ポラニーは、行動する自分と、他者を観察している自分を近位項・遠位項という概念で表している。誰もが行動者であり、誰もがほとんどの時は観察者である。

高齢者が健康であるとき、その探究心、好奇心、知識や技能を得ようとする欲求は、若年世代よりはるかに強い。それぞれの社会活動における「暗黙知」を誰が、どこで、どのように伝えるかということが、高齢者の社会活動を活性化することに大きな影響を及ぼす。

野中・竹内（1996）は、暗黙知と形式知について知識創造を行い、より高次の知識へと循環させる SECI モデルを示した。

知識が暗黙知と形式知の社会的相互作用を通じて形成される 4 つの知識変換モード

- 共同化 暗黙知から暗黙知へ—経験の共有により、暗黙知を創造するプロセス
- 表出化 暗黙知から形式知へ—暗黙知を明確なコンセプトに表すプロセス
- 連結化 形式知から形式知へ—コンセプトを組み合わせることで 1 つの知識体系を作り出すプロセス
- 内面化 形式知から暗黙知へ—形式知を暗黙知へ体化するプロセス

“個々人の体験が共同化、表出化、連結化をつうじて、メンタル・モデルや技術的ノウハウという形で暗黙知ベースへ内面化されるとき、それらは彼らにとって非常に貴重な財産となる。”

知識の変換を行うプロセスを表したものが、図 2-3 である。



図 2-3 4つの知識変換モード「知識創造企業」野中・竹内(1996) 東洋経済新報社 P93 より引用

梅本（2012）は、ナレッジマネジメントの簡潔な定義を

“知の創造・共有・活用の実践と、それを理解し説明する学問分野”

であるとし、ナレッジマネジメントの実践においては「知」という言葉がデータ・情報・知識・知恵をマネジメントすると述べている。それを表したものが図 2-4 である。

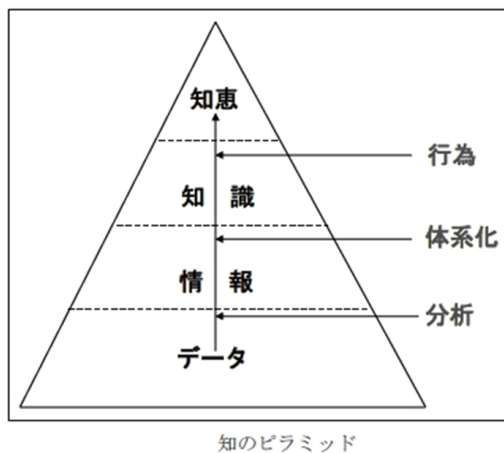


図 2-4 知のピラミッド「ナレッジマネジメント：最近の理解と動向」梅本(2012) P276
より引用

「知」の4つのレベルは、このように定義されている。

“データ：生命体（人間）が創り出した信号・記号（文字・数字）の羅列

情報：データから抽出された断片的な意味

知識：行為につながる価値ある情報体系

知恵：実行されて、有効だとわかり、時間の試練に耐えた知識”

“データから情報を抽出するのが「分析」であり、情報から知識を創造するのが「体系化」であり、知識を知恵に昇華するのが知識を実行するという「行為」である。”

“熟練職人の技能という暗黙知（身体知）をマニュアル化するとき、それは質問という形式知により少しずつ表出化され、形式知になっていく。逆に、マニュアルに書いてある形式知を何度も実行する過程で、元の言葉は忘れられて、意識しなくてもできるようになり、感覚的な記憶と身体的記憶としてのまとまった暗黙知になっていく。”

高齢者はリタイアメントした後、たいていは地域などの社会とつながることになる。地域社会においては、多様な個人の持つ「感覚的」「身体的」な暗黙知と、新しい形式知を得て自らのものにしようとする意欲的な欲求が、同じコミュニティの中に存在する。このことから、高齢者の活性化には知識科学的視点が不可欠であると言える。

福島（2009）は、知識移転について次のように述べている。

“両者の間に熟練のレベルの差がある場合、知識移転といってもそう簡単に A から B へと移転するとはいえないという点である。

レベルに開きがあると、ある種の教授的技能が必要とされることがある。これは特定の分野の熟練そのものとは異なる概念である。”

“では教授的技能とは何であろうか。それは知識・技能を伝達しようとする相手がもつ理解や技能のレベルを観察し、その理解可能圏内で有効な形に知識の内容を変形する能力のことである。”

福島は、知識移転をする側の「能力」について述べている。社会活動を行う時には、その指導や説明を行う「リーダー」「メディエーター」の資質が深く関係してくる。

2.3.2 リーダーシップ

上田（2003）は、リーダーシップについて次のように述べている。

“社会や組織の中で誰がリーダーであるかとか、リーダーとなるためにはどのような資質を備えていなければならないかという問題は、時代を越えて普遍的なものとして重視されてきた。リーダーシップ（leadership）という言葉の認知度も一般的には極めて高い。

しかし、リーダーシップという用語を正確に定義することはなかなか難しい。”

“管理者のリーダーシップは、その公式的権限に伴う強制力に基づくのではなく、彼（女）自身やその仕事の能力などに対して部下が感じる魅力や尊敬の念に基づいたものでなければならない。したがって、公式的権限を持っていながらリーダーシップを行使できない管理者もいれば、公式的権限を持たなくても強いリーダーシップを行使できる人間もいることになる。”

オーケストラの「リーダー」と言えば、指揮者である。山岸（2013）から引用する。

“情報化組織であるオーケストラは、多くのリーダーを必要としない。必要なのはたった一人のリーダーである指揮者だ。指揮者は、オーケストラという組織の芸術上のトップマネジメントである。”

“さらに指揮者に求められる、おそらく最大の要素が、演奏家集団を統率する力である。”

“演奏家をどう統率するか、そのやり方は百人百様だ。しかし真にカリスマ性のある

指揮者は、強く導くだけでなく、自然と演奏家をその気にさせる。つまり、指揮者の要求する音楽を実現するために、演奏家に自発的に協力しようと思わせる力である。”

“成果を上げるには指揮の技術ばかりではなく、指揮者自身の人間性をすべてさらけ出し、熟達したコミュニケーション力によって、目の前の演奏家に自分の望む音楽を奏でさせる力が必要である。”

実際には、オーケストラにはコンサートマスターはじめ、パートリーダー、マネージャーなどもいる。3章で述べるが、これがアマチュアオーケストラ活動であれば、団長や会計など色々な世話役も必要となる。しかし指揮者1人の影響力により、アマチュアオーケストラ団体は、どのようにも変わってしまう。

これは、音楽活動に限らず、老人会・サロンなどでも全く同じである。

そこで、技術や経験の長さを必要とするリーダーから、コミュニティ活動の世話役に視点を変えてみる。

小玉ら（2009）は当時、高齢者リーダーの特徴に関する報告が少なく、特に集団内の支え合いを検討した研究がないことから、老人クラブ所属の地域の「世話役」と、「一般参加者」へ質問紙調査を行い、比較している。それによると、

“高齢者の活動状況に変化が生じる契機は80歳代にあると考えられ、その「80歳以上」は、一般参加者である確率が高かった。”

“世話役について、参加頻度が高いだけ友人数も多いという関連がみられた。”

“サポート受領意識が高い世話役達は、自分とつながる他者を多様に把握しており、ネットワークの紐帯の結節点にいて考えられる。言い換えれば、メンバーの評価があつてこそその世話役だと理解することができる。—中略— 一方で、一般参加者は世話役の場合と異なり参加頻度が高くても友人数の多いことに必ずしもつながっていなかった。中には、老人クラブ等活動参加に拠らない友人を多くもつ高齢者も少なからず存在した。”

この質問紙調査では何らかの係の役目を担う世話役の回答がほぼ半数を占めていた。積極的な人は当日活動のための係や当番などを引き受け、何らかの役割分担をしていると推察されるが、活動を提供する側へ関わることにより、社会活動の積極的参加、周囲への声掛けを促すきっかけになっていることが読み取れる。

2.3.3 メディエーター

リーダーと比べて、日本ではまだあまり馴染みのない「メディエーター」。この日本語訳は「仲裁人」「調停者」であるが、日本語の「まとめ役」も英訳では Mediator と訳される。実際メディエーターはどのような役目であるのか、日本では先行研究レビューもごく少数であった。

渡辺（2013）は、ドイツにおけるメディエーション制度から、メディエーションを「司法外で紛争を解決する方法」とし、メディエーターの役割は司法側ではない「当事者の付き添い」として当事者全体の利益に働く、としている。また、

“メディエーターについてのヨーロッパの定義は存在しない。例を挙げると、フランスではメディエーターは 500 時間のトレーニングと学位が必要であるが、ポーランドでは 60 時間である。ドイツでは「メディエーター」は登録商標のようにではなく、だれでもこの名称を称することができる。” と例を挙げている。他に「国際家事メディエーション」があり、国際的な家族に関わる連れ去りなど、紛争事件におけるメディエーションの定義を説明している。

日本では医療対話の仲介者として、医療現場での呼称に「メディエーター」と使うことが一般的であり、これには資格が必要となる。

安藤（2011）は、医療者の立場から、

“医療者が自分の中にメディエーターを持つようにイメージして、患者の思いを受け入れて共感し、また自分自身を客観的にみる眼を持って対話する「セルフメディエーション」をすると、協調的な対話がしやすい。”

と、述べ、例として救急受診などで患者との信頼関係を築いていない時に患者の不安な心に共感し、寄り添うことで、「セルフメディエーション」が有効であるとしている。意図的に医療者が自分の中にメディエーターとしての「第三者の眼」を作る、ということである。

池島ら（2013）は、小学校教育の中でピア・メディエーションを取り入れ効果測定を行っている。4 年生のクラスで「あいさつスキル」「頼み方スキル」に加えて、「もめごと解決スキル」としてロールプレイングのトレーニングを行い、分析している。最初は担任がメディエーターとして手本を見せるうちに児童が習得し、自ら進んで揉め事の「調停者」となった例を挙げている。

石谷（2013）は、「アート・メディエーター」としてセラピストやマネジメントのメ

ディエーター役割の可能性にふれつつ、セラピストとアート・コーディネーターの中間的な役割として、「アート・メディエーター」を提案している。アートの教育や美術館などの専門的職業以外に、広くアート全般に関わる人を対象と述べている。

西島（2013）は、本研究に最も近い形のメディエーター像を述べている。

アメリカのセントルイスは「スライド・ダンス」が盛んな地域であり、2000 年前後から独自のチームがいくつかある。無料で登録も必要なく、多い時には毎回 100 人という経験の異なる新メンバーの出入りもある。指導者の他に「ヘルパー」という各チームかけもちの補助的指導者もいる。しかし、その他にこのチームのレギュラーメンバーの中で熟達した面倒見の良いメンバーがおり、西島は便宜上「メディエーター」と呼んでいる。新メンバーを手とり足とり面倒を見る役であり、指導者の補助的役割をする。また、指導以外にもレッスンをスムーズにさせる配慮を行う。新メンバーをリラックスさせ、励まし、「次回も来たい」と思わせる言葉もかける。

“新メンバーは指導者やヘルパーよりもむしろメディエーターに教えられることが多く、またメディエーターは新たなメディエーターをも育てていると言えるだろう。”

2.3.4 サービス科学と価値共創

Lusch and Vargo（2014）らは、GD ロジックを抜け出して「取引」を考えたとき
1. リソースを集めて高度化する 2. サービスとサービスを交換する 3. 価値を共創する
という 3 つの根本的なものを挙げている。さらに、「会社と顧客」ではなく、「actor to actor (A2A)」という Actor に中心を置いた見方へと視点を移す必要性を述べている。

「漁師は、海で魚を取ることに長けており、農家も体力・知恵を強化し、道具を整える —中略— サービスに視点を置いた解釈は、actor が持っていて、市場において価値がある唯一のリソース、すなわち彼らの知識と技術に焦点を当てるのであって、その副産物（魚や穀物）にではない」とし、Actor 自身の価値を述べている。

「“顧客”は常に、価値を共創する一方の主役である。」「“価値”とは、それが直接のサービスであろうと、グッズを介したものでであろうと、actor 間のやり取りを通じて共創される何らかの“もの”である。つまり、患者に医療行為を提供する医者は、患者と価値を共創しているのであって、決して単独で創造しているのではない。また、もし医者が患者に薬というグッズを提供したのであれば、それはサービス提供を補助

するための“装置”とみるべきである。いずれの場合においても、“医療行為”とは、まさに価値共創行為であることがわかる。」

「例として、子どもがおもちゃで遊んでいることを想定してみよう。一人の場合もあれば、友達との場合もあり、grandparents との場合もある。その場所も、友達の家であったり、自分の家であったり、grandparents の家であったりする。さらにはテレビを見ながらであったり、音楽を聴きながらであったりする。それぞれの文脈において、価値の共創は異なってくる。このことはまた、S-D ロジックの原則の中にある、すべての社会的、経済的 actor はリソースインテグレーターであり、価値は受ける側によって常に個別的かつ現象的に知覚されることにも呼応している。そのため、価値の創造は、それが創られ、評価される社会システムの文脈の中で、個人特有的に評価される必要がある。」

サービスにグッズが介入する場合にそれは「装置」として機能すると見るべきであり、価値創造は actor 自身の文脈の中にこそある、このことが Vargo のサービス価値であると読み取れる。

サービス科学の視点から、リーダーとフォロワーの関係について小坂（2012）は、次のように述べている。

“フォロワーはリーダーとのコミュニケーションを通じて、目指すべき目的が共通善であると判断すると、「主体性」と「自主性」のある献身的な働き掛けでリーダーに影響力を行使する。”

“フォロワーはリーダーの本音を聞くことでリーダーの理解が深まる。”

“「サービス場」において、リーダーを知ることと同じぐらい大事なのがフォロワー自身を知ってもらうことである。なぜなら、フォロワーの発言や態度、行動、成果はフォロワーがどのような人物であるかをリーダーに伝えるメッセージとなって、フォロワーのブランド形成に大きく影響するからである。”

“高いブランドを持つフォロワーはリーダーからの協力を得られやすくなるため、より一層高いサービス価値を提供することができる。”

「人に付随する概念」としての「ブランド」が高いフォロワーは、価値共創プロセスの重要な役割である。

2.4 先行研究のまとめ

以上の先行研究から、本研究に対しての位置づけを図 2-5 に表した。

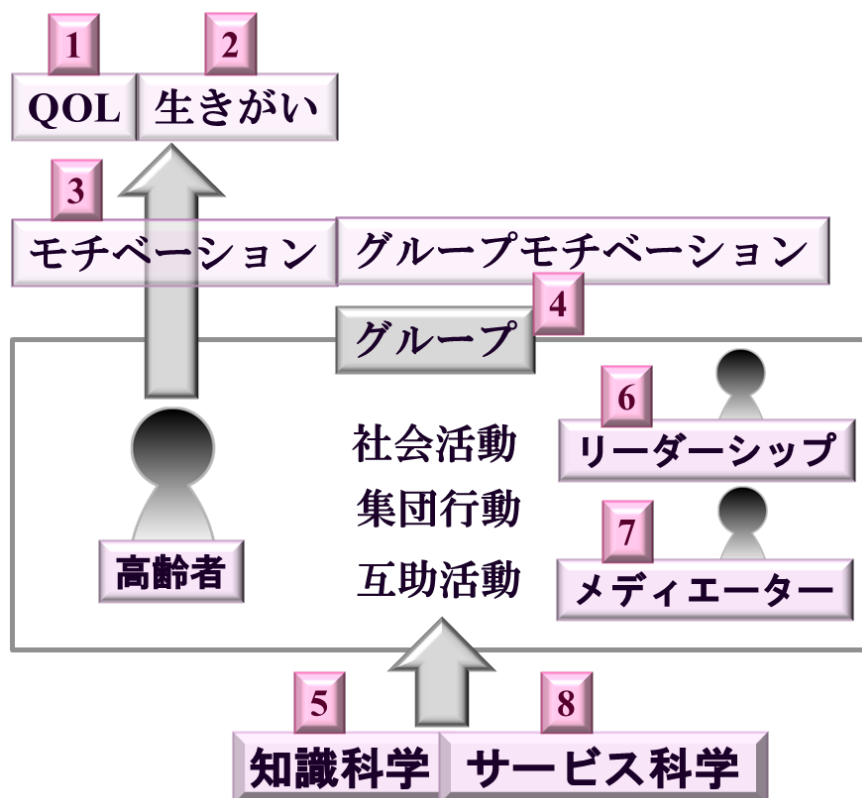


図 2-5 本研究における、先行研究の位置づけ

1. QOL

- ・ QOL は個人の主観的なものである。
 - ・ 健康であることだけが必ずしも「生きがい」にはつながっていない。
 - ・ 健康であっても、何らかの問題意識がある時にその価値が再考される。
 - ・ 高齢者は年々、若年時と異なり身体的な変化が伴う。
- ⇒この負の要素があっても、個人が主観的にみて QOL 向上が感じられる取り組みが活性化につながる。

2. 生きがい

- ・生きがいは、日本語特有の言葉である。
- ・「生きがい」という言葉は、その時代背景とともに使われ方が変化している。
- ・一見幸福そうに見える人に生きがいがあるわけではない。（QOL と共通点）
- ・他者（他の生物）の客観的な成長にも生きがいがある。

家族・他者からの影響、所属する場の役割などにもある。（生きる張合い）

⇒これを裏付けるデータが、年金シニアプラン総合研究機構の結果である。

（トップ2 が家族・趣味）

3. モチベーション

- ・組織行動の研究でも問われることが多いため、マズロー欲求理論の階層で言うと、高次の部分、承認と自己実現が多く取り上げられる。
- ・マズローの欲求理論はモチベーション論ではない、という議論・論文も多い。

そのため他理論も多く提唱されているが、対象を高齢者として考えると、自己実現の欲求は緩やかであり、マズローの欲求理論と照らし合わせた。

⇒日本での生きがい研究では源流である神谷の「生きがいについて」は、生きがいを7つの欲求とした「欲求理論」の集大成とも言える。モチベーションを日本で考えた時、生きがい概念に非常に近いのではないかと考える。

4. 組織行動と社会活動・グループモチベーション

- ・組織行動には、その役割を通して相互作用がある。
- ・集団の活動においては、他者からの影響が個人へ相互作用となり、個人の行動や業績、さらには個人のモチベーションにもつながる。個人には、自己とチームの効力感両方が存在し、さらに個人のモチベーションにも影響している。グループ効力感を高めることが大きな業績の要因にもなる。
- ・コミュニティでは、その「場」に出向くことで、交流や信頼も生まれる。
- ・互助活動としてのサロンでは「見守り」など、安全についての相互効果も生じる。

⇒高齢者は年々行動範囲が地域内へと狭くなる。高齢者活動は全国各地、市町村、町内会レベルへと小規模になるため、場所ごとの多様性が生じる。

しかし小規模な中にも個人とグループ2つの効力感が得られれば、モチベーション

の向上にもつながり、互助の役割も果たす。

高齢者は職場と異なり、自分の意思で自らが「所属する組織を選ぶ」ことになるため、通い続ける継続性を持つ「場作り」が必要である。

5. 知識科学

- ・知識を得ようと行動する時、知識の技術伝達方法である形式知は、その伝達過程・特に指導において、多様性があるために全てが容易というわけではない。
⇒高齢者は若年世代よりも多くの知識を持ち、さらに知識を得ようと行動する。
暗黙知・形式知の理解は、高齢者の豊かな長い人生経験を考えた時、非常に重要な位置付けである。

知識の形式知化を助ける存在として、リーダー・メディエーターがある。

6. リーダーシップ

- ・リーダーは、その名前だけの「地位」ではなく、周囲の尊敬・納得を得られる存在でなければならない。これは、例えトップマネジメントを行える「指揮者」でさえも同じである。
- ・また、同様に「世話役」もメンバーからの評価が必要とされるポジションである。
⇒今回は引用していないが、指揮者というリーダー不在で活動するオーケストラの研究もある。しかしプロオーケストラでさえ、その必要性が強く問われるリーダーという存在は、特に多様な環境の高齢者が集う「場」を活性化に導く上で不可欠であると思われる。
高齢者のリーダー養成講座などを設け、募集している自治体もあるが、その後のサポート不足などで、成果としては非常に乏しい。その意味では、周囲から自然に尊敬・信頼を持たれてリーダーになる人材が活躍する場を用意の方が現実的である。

7. メディエーター

- ・欧米での調停「メディエーション」をする者が「メディエーター」と呼ばれ、ヨーロッパでもはっきりした定義がないことで、日本ではさらにあまり馴染みのない言葉である。

- ・日本において医療分野でのケアでは医療従事者が取得できる資格の認定もあるが、取り上げた事例のように使われる場所としては様々である。しかし、指導者・リーダーとは違い、参加者・利用する側に寄り添うという立場のものである。

⇒Mediator、QOL、Motivation は、日本で主に英語で使用されていることから、医療用語、経済分野から普及していることが多い。日本語で考えた時、近いと思われる言葉は、世話役、まとめ役、安定、生きがい・はりあいなどが考えられる。

8. サービス

- ・サービスはActor に中心を置いた見方で文脈が重要、フォロワーはリーダーの支えとなるが、メディエーターは参加者の支えとなる。

⇒高齢者の社会活動で「サービス」「互助」を考えたとき、価値共創を行うために必要なステークホルダーとして「リーダー」「メディエーター」の存在は重要な位置付けとなる。

高齢者の活性化促進には、まず QOL・生きがいが重要であり、そのためのモチベーション形成はグループ活動を通して行われる。グループ活動の場を良好に保つリーダー・メディエーターと高齢者の関わりを議論するために知識科学とサービス科学は重要な要素となる。

第 3 章

高齢者の活性化促進モデル

高齢者が生き生きと活動しているアマチュアオーケストラJ管弦楽団の事例研究から、高齢者が活性化する社会活動において必要となる考え方・行動を検証し、活性化促進モデルの構築を行う。

3.1 高齢者が活性化している J 管弦楽団の事例

3.1.1 J 管弦楽団の活動

1978 年に発足した J 管弦楽団は、シュトラウス・ファミリーをはじめとする「ウィーン音楽」のみを演奏するアマチュアオーケストラである。プロのオーケストラでは取り上げない日本初演曲や、あまり演奏されない曲を積極的に演奏発表する方針のもと、これまでに日本初演曲 70 曲を含む 300 曲を超える曲目を演奏してきた。1979 年 7 月 14 日第 1 回コンサート開催以来、毎年 1 回の定期演奏会を、無料で欠かすことなく実施している。

現在の団員は 40 名、内訳は男性 20-30 代 1 名、40-50 代 3 名、60 代以上 28 名、女性 20-30 代 3 名、40-50 代 4 名、60 代以上が 5 名である。コンサートマスターの男性 2 名は 70 代、常任指揮者も 78 歳、80 歳以上の男女も含まれており、アマチュアオーケストラの中でも高齢者の割合が非常に多い楽団である。メンバーのパターンとしては大学オーケストラ OB などのグループや、企業定年後の参加（ブランクはあるが音楽経験が有る）が多い。常任指揮者も 78 才、もとプロオーケストラの指揮出身であり

通常の指導も兼ねている。現在はアマチュアオーケストラ 4 団体を受け持つ。運営は会員の会費を充て、活動場所は、音の出せる東京都内の賃貸ビル 1 室を使い、月に 2 回日曜日の午後、指揮者と共に全員で練習を 4 時間行う。プロ奏者のいない楽団のため、パート練習は行わない。その後は「1 練習につき 1 反省会」という方針のもと、近隣の決まった飲食店に移動し「反省会」としての懇親会を毎回行う。ここでは、その日の練習の反省も含めた音楽談義が主な内容であり、個人的な音楽指導も含め、プロである指揮者との音楽知識の共有も行えることが団員の楽しみとなっている。

3.1.2 J 管弦楽団の定期演奏会活動

定期演奏会の会場は公立ホールを使い、会員からの会費（年会費 24,000 円）のみで運営されている。演奏会の広報活動は、会場のある自治体へのチラシが主であるが「読売新聞シティライフ」に掲載されれば、100～200 名動員数が増える。また毎年同じ会場で定期演奏会を行うことにより、リピーターも増えており開場前に並ぶ長い列ができる。

2014 年 5 月、総合文化センター大ホールで行われた定期演奏会は、観客数約 720 名と史上最高を動員した。（前年までの最高動員数は 550 名）開場の 1 時間以上前に並ぶ人も多く、開場時には既に 100 名を超える長い列ができていた。来場していた大半は一見して 60 代後半以上、男女比で見るとやや男性が多かった。

2014 年からは「聴衆との一体感」を目指し開演前の 30 分間を使い「ロビーコンサート」を実施。担当の弦楽四重奏は、全て 70 才代の演奏者だった。入口ソファなどを利用し、多くの聴衆が演奏を楽しんだ。終了後「コンサート前に演奏を聴けて楽しめたが本番前に疲れないのか？」と演奏者を心配して聴衆から声をかける姿もみられた。演奏中に居眠りしている聴衆も見当たらず、暗い中でも様々に工夫してプログラムに記載された演奏曲目の解説を真剣に読む高齢者の聴衆が目立った。

演奏終盤では、「ブラボー」の声も多くかかり、アンコールも 3 曲と、盛況のうちに終了した。

3.1.3 反省会の場

J 管弦楽団では月に 2 回行われる練習の後に近隣の会場で、毎回「反省会」と称する「飲み会」を行っている。指揮者自らが提案したという「1 練習につき 1 反省会」

という場に同行した。

毎回決まった楽器を置ける広い個室を借り切ることで、特別な用事のない限り指揮者はじめ団長と、ほとんどの団員が参加する。メンバーは、反省会の場で指揮者との「音楽談義」が深められることを期待している。その日の練習や演奏についてだけではなく、現在練習している曲についての解釈や、プロオーケストラの奏法などで毎回盛り上がる。毎回の会場の予約や費用の交渉、継続して使えるようにスケジュールをあらかじめ店に伝えておくなど、反省会の場作りには全て団長があたっている。

3.2 仮説構築

3.2.1 定期演奏会・反省会の場から J 管弦楽団の活動を考える

定期演奏会の熱気と反省会の場からは、団員が同じ目標のもと団結し、指揮者を厚く信頼していることがわかった。

J 楽団で常任指揮者が携わってきた 4 年間のうち最初は「休憩時間に席を立ち、帰ってしまう人」がいたそう。無料のコンサートを提供するため、音楽ファン以外にも色々な観客が訪れる。しかし 2014 年の演奏会では、客席の減少は全く見られなくなった。同じ公共の会場を利用するため、会場の管理側からも同じ感想があったという。リピーターが少しずつ増えていることから、団体として安定していることがわかる。毎回の練習を指揮者で行い、終了後も反省会の場で音楽談義を交わすことにより、指揮者から得られる演奏技術・音楽知識の向上を自らのモチベーション、QOL 向上へとつなげているとわかった。

集団がまとまるためには、環境を整える「まとめ役」として団長の存在も大きい。団長自身は弦楽器の奏者として練習に参加しながら、問い合わせの対応、練習場の準備、会計や曲目、全団員の楽譜手配、自治体や会場との交渉、反省会会場のセッティングなど「場」を整える重要な役目である。

3.2.2 仮説モデル構築

演奏会・反省会の場への同行から、団員のモチベーションと音楽技術・スキルに関するアマチュアオーケストラ活動の仮説モデルを提示する。図 3-1 に示す。

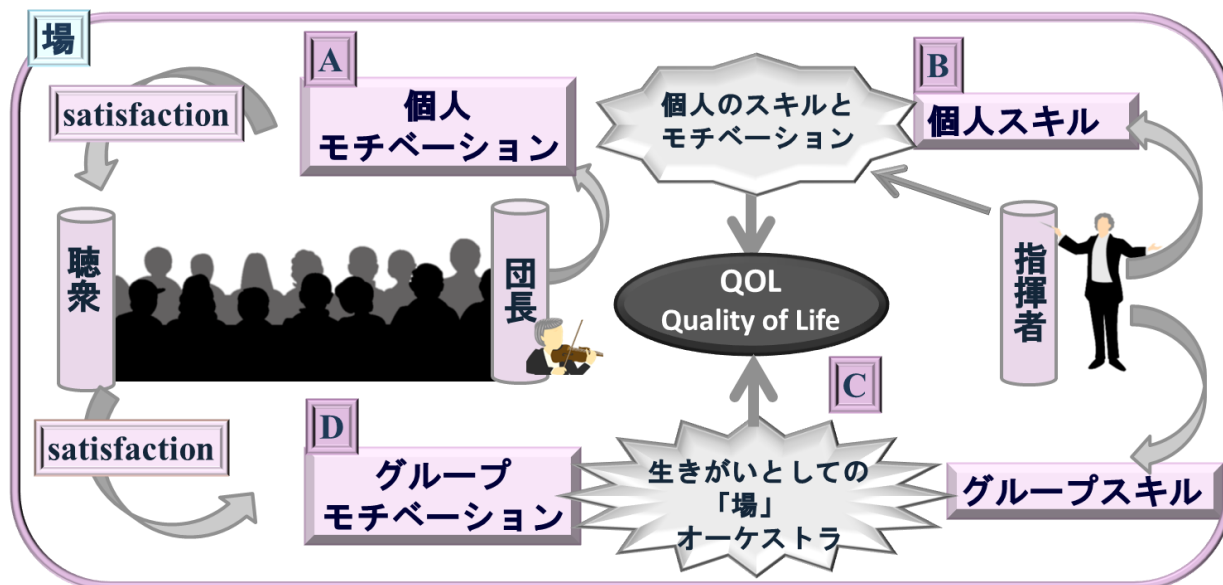


図 3-1 アマチュアオーケストラ活動の仮説モデル

この仮説図における ABCD 領域で、アンケート設問を設定する。

- A 領域：個人のモチベーションについて
- B 領域：個人のスキルについて
- C 領域：QOL 向上、「生きがいの場」について
- D 領域：団体のモチベーション（環境）について

3.3 仮説検証

3.3.1 インタビュー

J 管弦楽団の団員 2 名、団長、指揮者にインタビューを行った。

□ J 管弦楽団団員 弦楽器 I 氏

- ・メンバーのパターンとして、大学オーケストラ OB などのグループや、企業定年後の参加（かつて音楽経験）がある。
- ・女性に比べて会社に所属していた男性はどうしてもコミュニケーションにおいて不器用、会社の仲間との付き合いだけ続けるのはもったいない。色々な趣味に参加し

ていくきっかけや誘いを持つこと、また老後元気でいるようにする働きかけを持つべきである。その意味で「シュトラウス作曲のような音楽」はなじみやすい。興味のない曲であるとコンサートに行きづらい。

- ・人の集まるどのような集団にも、揉め事がつきものだが、大目に認め合えるのは、指揮者とのコミュニケーションや、指導（教えてもらえる知識）の効果である。
- ・音楽の感動には、WIN×WIN の関係がある。
- ・指揮者と演奏者が練習を積み重ね、本番で盛り上がる。

□ J 管弦楽団 団員 管楽器 T 氏

- ・定期演奏会で演奏者は、客の雰囲気を感じ取る。嬉しそうな雰囲気を感じると、リラックスでき、緊張が消える。
- ・聴衆は「良い演奏により、良い熱気」を感じている。プロよりもアマチュアの方が、このような意味でも楽しいという人は多い。
- ・優れた指揮者は、自分の知らない世界を引き出し、かつ演奏者をリラックスさせる。
- ・集団の中での練習でも「1 対 1 で対話している」のでコミュニケーションがとれている。
- ・「ついていきたい指揮者」とは、常に新鮮な、新しい発見をさせてくれる人。良く知り尽くした曲でも、「新しい解釈」をしてくれる人。現在の指揮者は、これに加え、「このような気持ち」という情景が頭に浮かぶ例えが非常に上手い。

□ J 管弦楽団 団長 M 氏

- ・楽団に入りたい目的は様々、自分は全くの初心者だった。先輩に誘われたり、知り合いに無理矢理引っ張りだされた人もいる。「シュトラウス作曲の音楽」が好きでウイーン音楽・舞踏会の再現として踊る為に、ダンスも習っている。
- ・一昨年観客の中に「良かったぞ」というような掛け声をタイミングよく上げた「はちまきをした男性」がいた。一昨年と同じ会場になる今年も来ないかと、指揮者も団員も楽しみにしている。

□ J 管弦楽団 指揮者 S 氏

- ・「人と人とのコミュニケーションが全て」

- ・演奏者の中には、遠方から交通費をかけて通って来る人もいる。
- ・企業では給料があり、同じ目的があるのでまとまる。しかし、アマチュアオーケストラは違う。プロのように入団テストがあるわけではないので技量がバラバラである。その中で何か月という長い時間で「練習は窮屈でなく楽しくあるべき。」これには「皆の意見や接点を大事」にし、リーダーシップも必要。
- ・演奏者と指揮者、お互いがキャッチボールのように理解できるようになると「演奏は数段上がる」演奏者からも指揮者に「意見が言える」関係は良い。
- ・限られた練習時間の中で、毎回行う「反省会」というコミュニケーションの場の役割は重要。指導の注意も「コミュニケーションの場」で行うことで「つるし上げ」にならずにすむ。「厳しさの中にも楽しさは必要」
- ・「無料のコンサート」の怖さは好きな時に帰れること。「無料のチケット」であっても、会場に残るには？演奏が良くなかったり、冷めた演奏をしたら、客に伝わり休憩で帰ってしまうだろう。休憩が終わり、客がどれだけ残っているか？「今日の客はどうか」というのは必ずわかる。
- ・今年から「会場に入ってきたら、その空間は聴衆と一体」となる為に「ロビーコンサート」を実施する。

3.3.2 アンケート結果

2014年6月、定期演奏会後のJ管弦楽団の団員に対して、アンケートを実施した。回収できたサンプル数は22名だった。(アンケート用紙は資料に添付)

内訳は、男性が50代2名、60代7名、70代5名の計14名、女性は20代1名、30代2名、40代1名、50代2名、60代2名、80代1名の計8名。

設問1は年齢、設問2は性別である。

設問3で、これまでに習得された楽器(声楽を含む)と習得年数・習得時期をたずねたところ、77%が、10代までに何らかの楽器を習得していた。図3-2に示す。

設問4で、それが現在のオーケストラパートの楽器という回答は、86%だった。図3-3に示す。

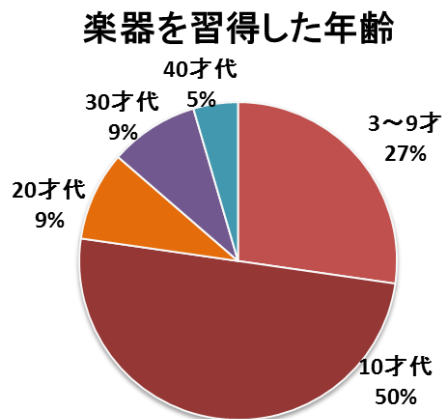


図 3-2 楽器を習得した年齢

習得した楽器が現在のパートか？

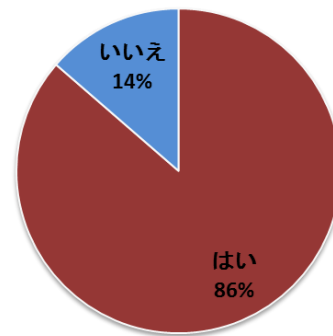


図 3-3 習得した楽器と現在のパート

設問 5、J 管弦楽団への入団時期は、1980 年創立時から 2013 年最近までとばらついていた。

設問 6 の入団理由は、知人の紹介が 68%と多数を占めた。図 3-4 に示す。

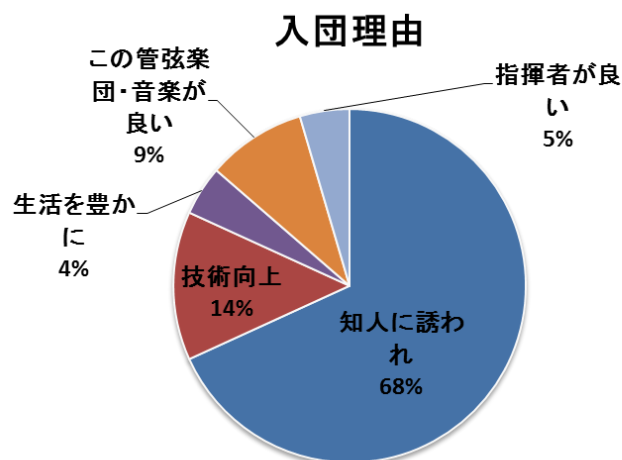


図 3-4 入団理由

設問 7 で年間に音楽会に出かける頻度に入団前と後で変化があるか、たずねたところ男女合わせた平均値では入団前が年間 6.9 回、入団後が年間 5.2 回と、入団後の方がやや回数が減っていた。元々演奏会に出かける回数が多かった団員が、オーケストラ活動や練習に占める時間の増加で回数が減ったと考えられる。

設問 8 は、他に出かける趣味を自由記述でたずねた。スポーツなど体を動かす趣味は少なく、文化活動に関係するものが多かった。図 3-5 に示す。

よく出かけるもの(趣味)

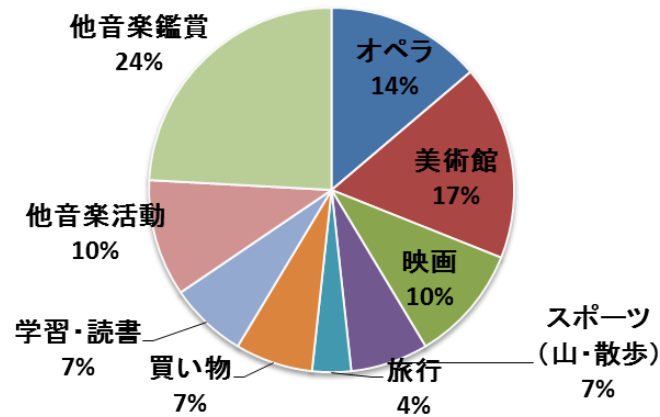


図 3-5 よく出かけるもの (他の趣味)

設問 9 以降は自由記述以外、5 つのレベルを用いて回答を求めた。

設問 9 は、楽器の練習時間で入団後、全体で「とても増えた」7 名、「増えた」9 名、「変わらない」6 名と、増加傾向がみられた。

設問 10 は、生活の中での優先度（プライオリティ）で、特に男性が高い傾向にあった。図 3-6 に示す。

オーケストラ活動の優先度

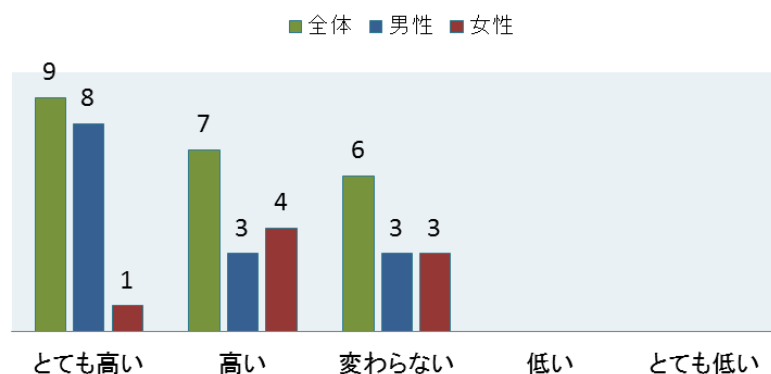


図 3-6 オーケストラ活動の優先度

設問 11 は、オーケストラ活動に参加することでの「生活のハリ」に関してたずねた。

特に男性が高く実感、女性は半数が実感していない傾向がみられた。図 3-7 に示す。

生活にハリが出たか？

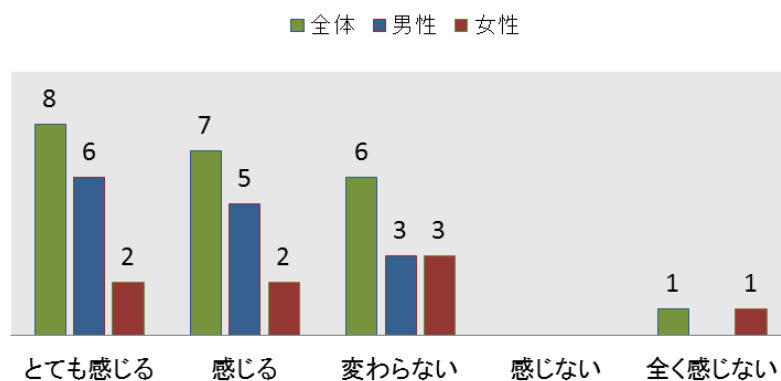


図 3-7 生活のハリについて

設問 12 は、今期の演奏会の満足度についてたずねると、男女共に「やや満足」が最も多いものの、「満足度が低い」という回答もみられた。図 3-8 に示す。

今季演奏会の満足度

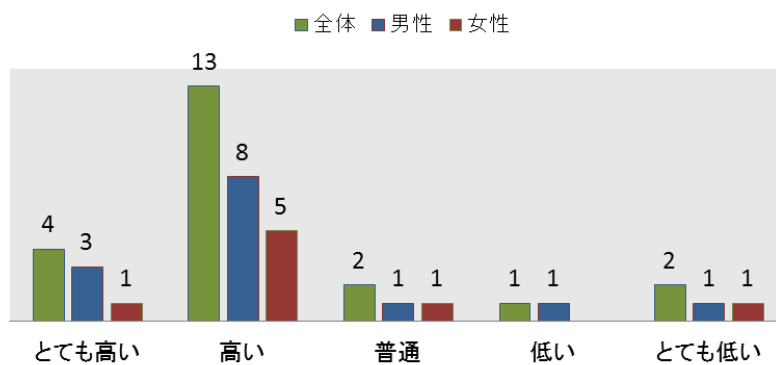


図 3-8 今季演奏会の満足度

設問 13 で、その理由について自由記述で集めたところ、自らの技術と演奏会の出来に不満があったために満足度が低くなったという傾向がみられた。自分自身とグループの演奏技術への不満、曲目の出来に対しての不満が、合計で 27%となっている。その一方で、聴衆の多さや、団体としての演奏・まとまり・環境としては満足であったために、総合的に考え「やや満足」を選択した団員が多かった。図 3-9 に示す。

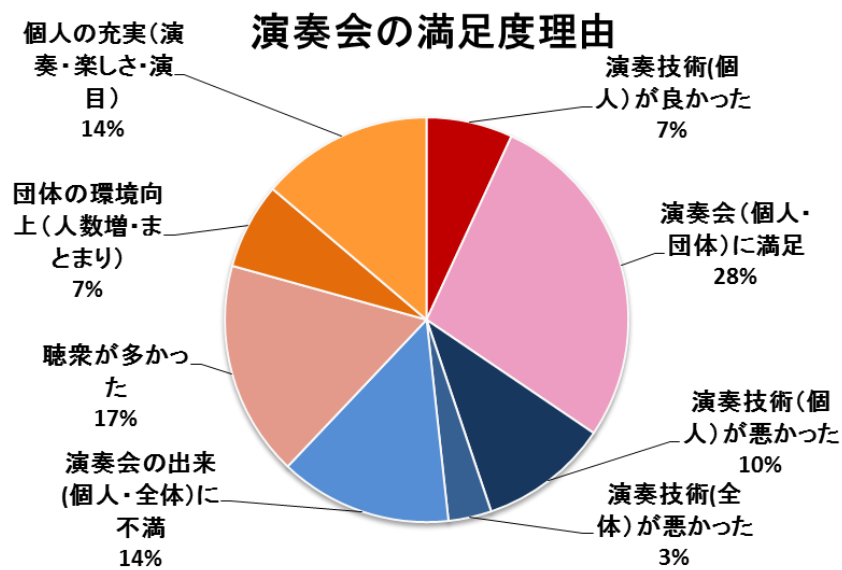


図 3-9 演奏会の満足度(自由記述)

設問 14 では「自分にとって」オーケストラ活動の中における重要度を 4 項目、5 レベルでたずねた。音楽の技術向上については、男女共に重要度が高い傾向がみられた。図 3-10 に示す。

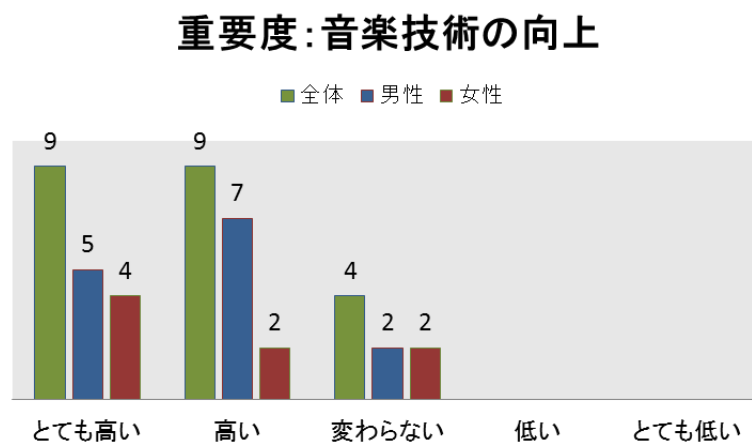


図 3-10 重要度：音楽技術の向上

団員・指揮者とのコミュニケーションは、共に高いが、女性に重要度が高めと感じる傾向がみられた。図 3-11 に示す。

重要度：団員・指揮者との コミュニケーション

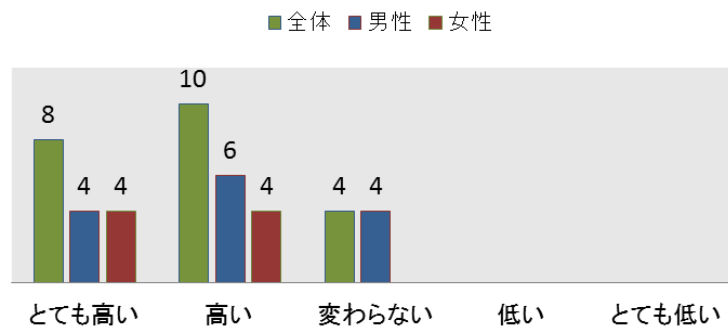


図 3-11 重要度：団員・指揮者とのコミュニケーション

団員・指揮者との「一体感」についても、女性がより高い重要度を示す傾向がみられた。図 3-12 に示す。

重要度：団員・指揮者との一体感

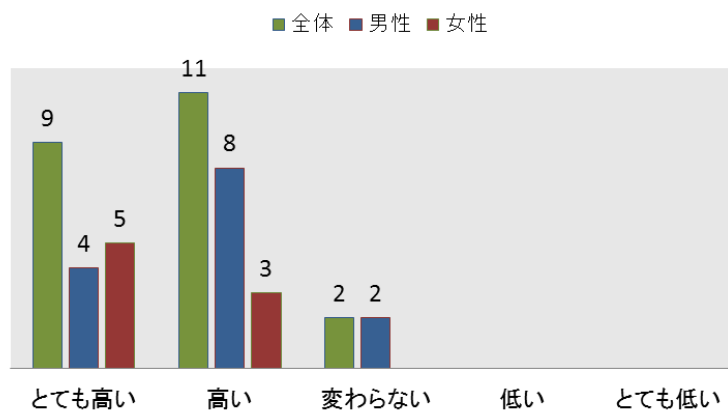


図 3-12 重要度：団員・指揮者との一体感

聴衆との一体感をたずねた項目においては、回答に一定の配慮はみられるが、他の項目に比べると重要度が低めという傾向がみられた。図 3-13 に示す。

重要度：聴衆との一体感

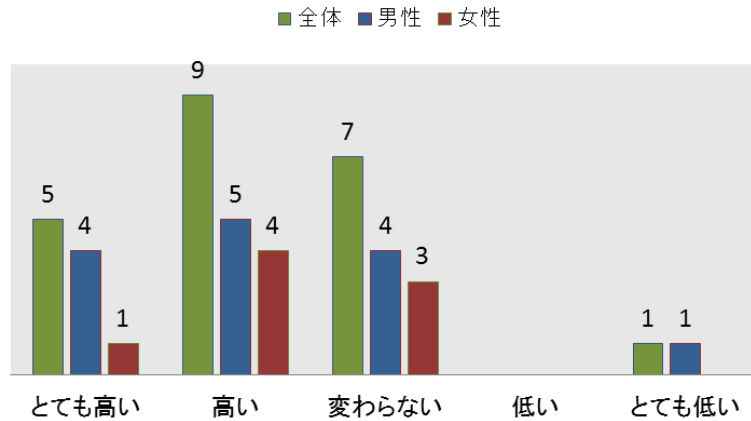


図 3-13 重要度：聴衆との一体感

設問 15 では、更に上記「重要度の 4 項目」について、「自身で、より優先度が高い順」に 4 枠で並べるよう、たずねた。最も優先度が高い 1 番目の枠では、音楽技術の向上が 57%を占め、最も少なかったのは、聴衆との一体感 5%だった。それに対して最も優先度の低い 4 番目の枠の中では、聴衆との一体感が 71%と、多くを占める。

図 3-14, 3-15 に示す。

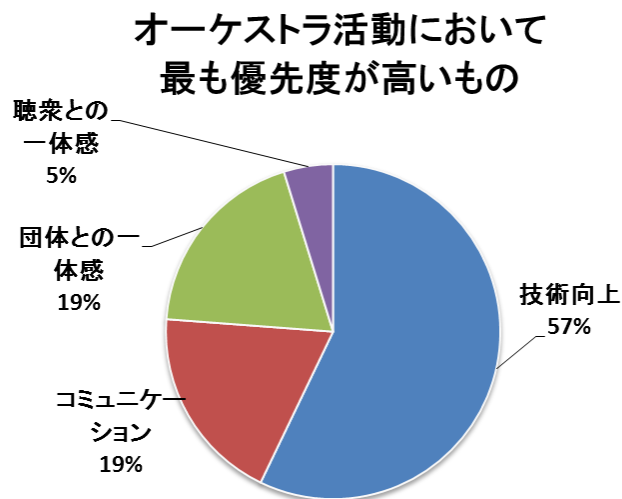


図 3-14 個人での優先度が高いもの

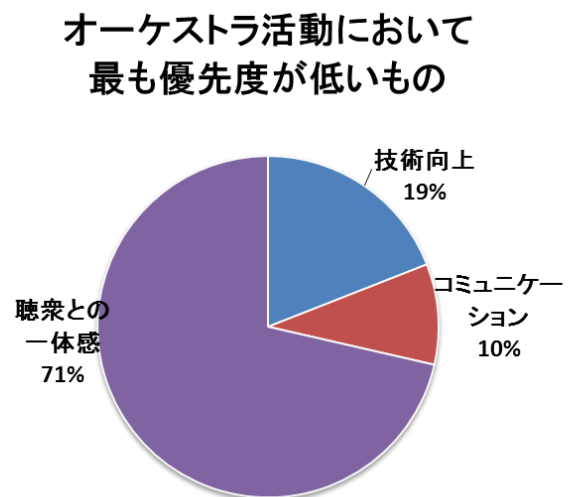


図 3-15 個人での優先度が低いもの

設問 16 は、アマチュアオーケストラ活動が盛んになるため必要なことを自由記述で求めた。アフターコーディングでまとめた結果、練習場所や発表会場の確保（財政）に自治体やメセナを希望する意見が 33%と最も多かった。次いで音楽を楽しみ、裾野を広げる場作りが 20%、指導者・リーダーの充実が 17%となった。ここで音楽的な質（技術）が必要と記述した回答は、6%にとどまった。図 3-16 に示す。

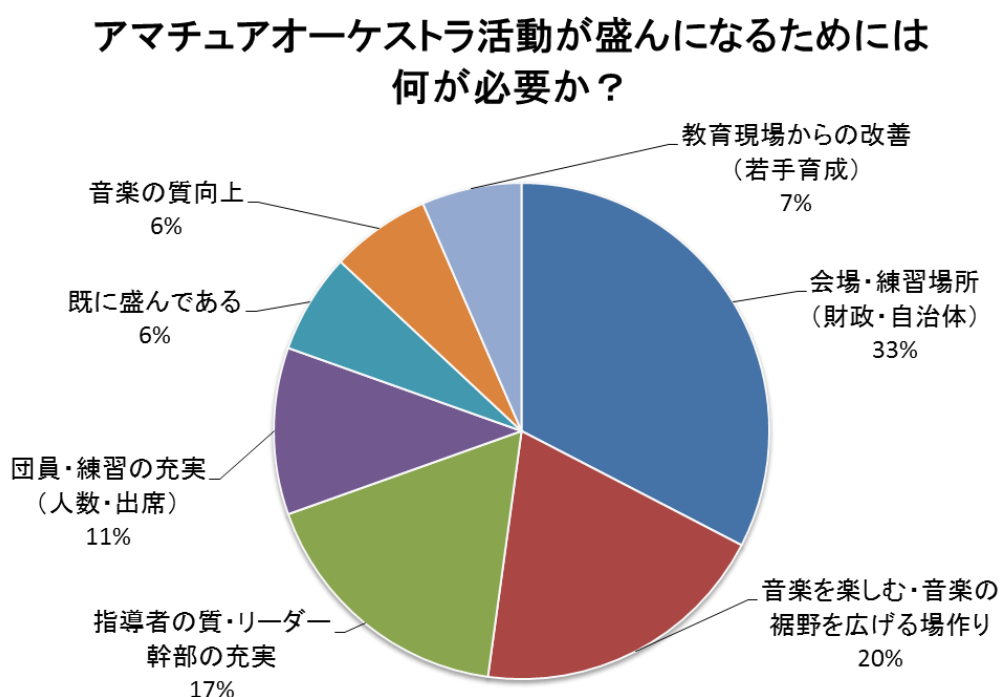


図 3-16 アマチュアオーケストラの活動が盛んになるために必要なこと（自由記述）

3.3.3 アンケート結果の検証

アンケート結果より、オーケストラ活動を活性化させるモチベーション形成の要因を考察した。技術の向上を「最も優先度が高い」と選択した回答が 57%であったこと、次いで指揮者・団員とのコミュニケーション、指揮者・団員との一体感という回答の選択は、ともに 19%となり、聴衆との一体感が 5%と最も低かった。参考に、順番として優先度の最も低くなる 4 番目の枠でも聴衆との一体感が 71%になっている。アマチュアオーケストラ団員としての個人の技術・モチベーションの維持には、このように発表の場においても自らのスキルが観客との共創よりも重要な役割を占めることがわかった。団体の活動としての環境に加え、技術の更なる上達を目指し、聴衆

との一体感より、まずは自らのスキル、音楽技術の方が優先するという結果が表れていた。「価値共創」は、主に団体の活動の中、指揮者・団長、団員どうしにおいて起こっていた。

3.4 考察

3.4.1 アマチュアオーケストラ活動における「活性化促進モデル」提示

個人が、高齢者の世代となり、仕事などの面において自らの時間に余裕ができた時、「昔とった杵柄」で再び自分で楽器を持ち、音楽活動へ参加しようとするモチベーションを持つ。団体に所属する責任感・緊張感から、意欲的に日々の練習を行い、個人の音楽技術、スキルを向上させる。図 3-17 に示す。

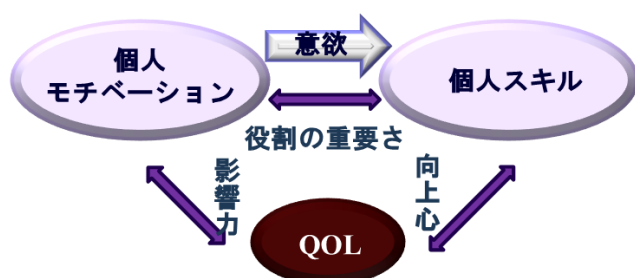


図 3-17 個人のモチベーションとスキル

個人のスキル向上は、団体の中で他の団員への良い刺激、切磋琢磨となり、その結果、団体としてのスキルも向上する。団体のスキル向上は、組織としての実力を高め、暗黙知として共有される。それはグループのまとまりとなり、環境としての充実、居心地の良さも生む。具体化した充実は、団結力、仲間意識を強固にしてグループのモチベーションを、さらに高める。グループのモチベーションは、また、個人の高揚感・充実感へと繋がる。図 3-18 に示す。

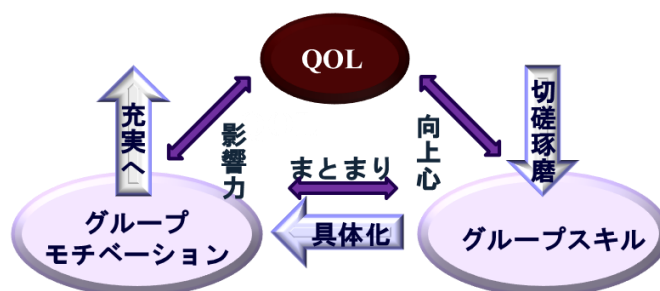


図 3-18 グループのモチベーションとスキル

個人の技術・モチベーション維持には良い環境の「場」と良いリーダーが重要となる。
 個人・グループの音楽スキルを支えているのは、指導を行うリーダーとしての指揮者であり、「スキルを高める場」としてグループ練習の環境にも影響する。
 個人・グループのモチベーションを支えているのは、グループの人間関係も含めた「環境としての場」を良好に保つまとめ役・メディエーターとしての団長である。
 グループを活性化する活動に導いていたのは、1年間継続してきた練習・努力の集大成としての定期演奏会であり、その演奏会の大成功には良い演奏と、その演奏を聴き会場を盛り上げる聴衆の存在もあった。持続・活性化する“生きがいの場”は個人のQOL向上となり、再び個人のモチベーションに寄与していた。
 「活性化促進モデル」として、図3-19に示す。

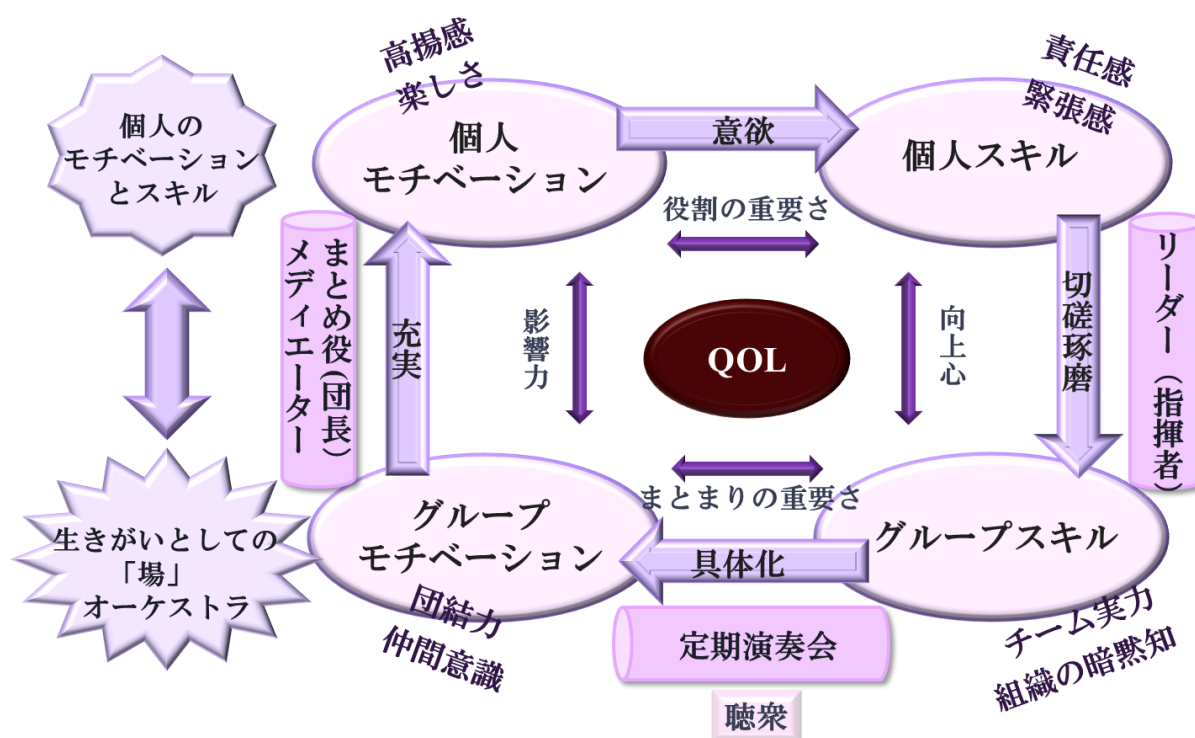


図3-19 アマチュアオーケストラの「活性化促進モデル」

3.4.2 J管弦楽団事例のまとめ

J管弦楽団の団員は、リーダーである指揮者とまとめ役である団長に支えられながら、演奏会という共通目標を持つ仲間と“生きがいの場”を築き、技術面で自己実現・

達成感を得、更なるスキル向上を目指して努力を続けるモチベーションを維持させている。

アマチュアオーケストラは聴衆に近い立場で、サービスとしての Actor to Actor の考えを実施し、草の根的な市民活動を行っている。若年期・現役時代から音楽に携わり、大学オケなどを通し社会活動を行っていたことで将来の「技術的・社会的備え」ができており、この「経験と結びついた」「自らの能力の活用」を高齢期に発揮し、団員同士で「学び合い、教え合い」ながら「自己実現」をはかり、居住地域を越えた「地縁」も築けている。

そして自己完結的な学習ではなく、「学習成果の社会還元」として無料で演奏会を開くことにより、偶然に訪れた一見の聴衆を新たなクラシック愛好者へと導き、リピーターとして楽しさ・趣味を見つけるというきっかけの提供を行っている。これはクラシック音楽界全体の敷居を低くし、新たなクラシック音楽の愛好者をプロ演奏家の有料コンサートや CD 購入へと繋げて、文化・芸術としての学びと生きがいを循環させる「社会貢献」ともなっている。このように持続・活性化した社会活動によって QOL 向上を行うアマチュアオーケストラの活動は、各省の目指す高齢社会への取り組みの全てを満たすものである。

J 管弦楽団では 1 練習につき 1 反省会を指導者である指揮者自らが提案、団員に対し、練習中だけではなく練習後もスキル向上に貢献していた。メディエーターである団長のマネジメントは、生きがいとなる活動の場と団員のモチベーションを支える。充実した活動の結果としての「良い演奏」は、定期演奏会において活動の集大成、「成果披露の場」となっていた。良い演奏は、固定ファンとしてのリピーター、観客動員数を増加させ、団員と指揮者、団長、さらには聴衆へも価値が提供される。定期演奏会を通して確認できる「個人・グループの技術の向上」は、また 1 年後の演奏会・新しい曲への挑戦というモチベーションにつながり、グループとして充実し、持続・活性化した活動を行っていた。

高齢者には、リタイア後の多くの時間を健康に過ごすため、持続・活性化した「生きがい作り」が重要である。高齢者が社会活動の中において団結し、良い演奏を創り上げ、社会還元もするアマチュアオーケストラの活動は、モチベーションとスキルを循環させることで QOL を向上させる「活性化促進モデル」が確立していた。

第 4 章

活性化促進モデル検証と価値共創モデル

この章では、第 3 章で得られた「活性化促進モデル」が他の高齢者活動においても当てはまるのか、次の 3 つの事例を使い比較・検証を行う。また、各事例において、リーダー・メディエーターは“生きがいの場”にどのように関わっているか、参加者との共創がどのように行われているのかを検証し、活性化促進モデルが価値共創モデルと成り得るか議論する。

4.1 高齢者のコミュニティ活動事例

4.1.1 A 町老人クラブ：自主的なボランティア活動

A 町は人口 50 万を超える地方都市の中において、その人口が市の 11%を占めるという比較的大きな町である。県庁周辺を中心部に通勤圏内ということもあり単身赴任者も多く、高齢化率は全国平均よりも下回っている。平成 24 年度の「まちづくりアンケート」においても、記入した参加者の半数が 60 代から 80 代であり、高齢者が元気な町である。

そこで高齢者には最も身近な存在である「老人クラブ」の事例として、実際に A 町を複数回訪れ見学、聞き取りを行った。

A 町はスポーツ・運動への参加も多いことが特徴的である。

地区担当の健康教室指導者（理学療法士）によると健康教室も人数オーバーで午前・午後の 2 部制に分けなければならないほどの盛況ぶりであるとわかった。また、A 町

のグラウンドゴルフは公民館ごとのチームで行い、勝利チームは市の選抜・県の選抜へと進むが、試合が近くなると普段は決して休まない健康教室でも「練習のため欠席」の申し出をし、チームで練習に取り組むということである。

■ A 町老人クラブの取り組み

A 町には 18 の老人クラブがあり、「地区連合」を形成、連合会長と各クラブの会長という組織で成る。県の高齢者支援事業モデル地区に指定された経緯もあり、会員数の増員に向け、日々活動をしている。このための自主的な取り組みとして、連合会長が年に 1 回、自ら発案・企画した新聞を発行して配布、新たな会員の獲得に努めている。発行費用は全て地元商店や病院などの広告でまかなう。12 面の内容は各老人クラブの活動のほかスポーツ大会の結果、ボランティア活動やパトロール活動とその成果、県内の受賞状況などであり、新規参入者だけでなく既会員が目にしてモチベーションアップにつながる取り組みを行っている。新聞がきっかけとなり、これまで地域活動に参加していなかった高齢者が、新たな参加者として活動への動機を持つことが多いという。また、全会員の 6 割が女性ということもあり、平成 26 年からは 18 クラブそれぞれ 1 人ずつ女性リーダーを置き「女性委員会」を新たに結成した。リーダーは女性だけの講演会などに出席し研修も受け、地域との懇親も深める。

■ インタビュー

A 町の連合会長と、新しい女性委員会のリーダーへインタビューを行った。代表的な意見を示す。

□ A 町老人クラブ 連合会長 I 氏

- ・A 町は男性会員も比較的多くスポーツも盛んな地域であるが、グラウンドゴルフとカラオケに偏らないようにしている。
- ・会員が古紙回収など自主的な経済活動で、年間 50 万ほどクラブ運営費に回す工夫も行っている。
- ・老人にかけるお金がもったいないという風潮から、補助などカットの動きもあるが、老人クラブの発展はネットワークづくりとしても地域の防災へとつながっている。
- ・また、地域の清掃などボランティア活動に日々頑張っている人を表彰などし、その貢献に応えたいと思う。

- ・トップが1人だけで長く色々と活躍し潰れたクラブもある。新しい人がなかなか役員にならない中、クラブを私物化しないよう心掛けている。

□ A町老人クラブ 女性委員会 T氏

- ・60を過ぎても老人クラブに入りたくない人は多い。
- ・趣味が同じ知人とはいっしょに行動したいというのが女性。
- ・女性が元気になると男性も元気になる。
- ・女性の特性を活かした取り組みとしてグラウンドゴルフ以外も企画をしたい。
- ・お金が発生すると参加は少なくなるので、材料費も1000円以下、活動でのおやつは手作りにしている。

■ 活性化の検証

A町の事例が、活性化促進モデルにあてはまっているか、見学とインタビューをもとに検証した。

個人が高齢者になり、地域社会の活動に参加するモチベーションを持った時、行動として、まず老人クラブなどに所属をし、その中で自分の得意なスポーツやボランティア活動から参加しようとする。A町では、18クラブの中の、それぞれ所属した「グループ」内において、スポーツやボランティア活動の技、地域のパトロールなどの方法を学ぶ。グループ内で技能が高く、または熱心に取り組んでいる他者のスキルを見ると、触発され自らも頑張ろうと努力する。個人の技能・取り組みは、やがてグループ全体の技能向上となる。地区連合の中においては、クラブごとに次はどこが県や市に表彰されるか、などの張合いもある。クラブのスキルは地域貢献の力となり、団結力を高め会員のモチベーションとなる。新聞掲載などで結果を確認し、さらに充実したクラブのモチベーションは、また会員個人のモチベーションへと良い循環を生み出す。

このスパイラルを助けA町老人クラブ全体を活性化させているのは、18クラブを指導者として俯瞰する連合会長であり、実際に会員個人と各クラブのグループを参加者の立場から“生きがいの場”として活性化させているのは、「まとめ役」としての女性リーダーである。

A町の「グループとしての成果」は、活動の表彰や全国大会での入賞と、それが「見える形」の新聞掲載だった。インターネットを使わない世代でも、新聞は写真や活字

として残る。努力の評価は自分達で地域貢献・地域の安全を担っているという自信とともにグループのモチベーションとなり、再び個人のモチベーションへとつながる持続・活性化した活動になっていた。図 4-1 に示す。

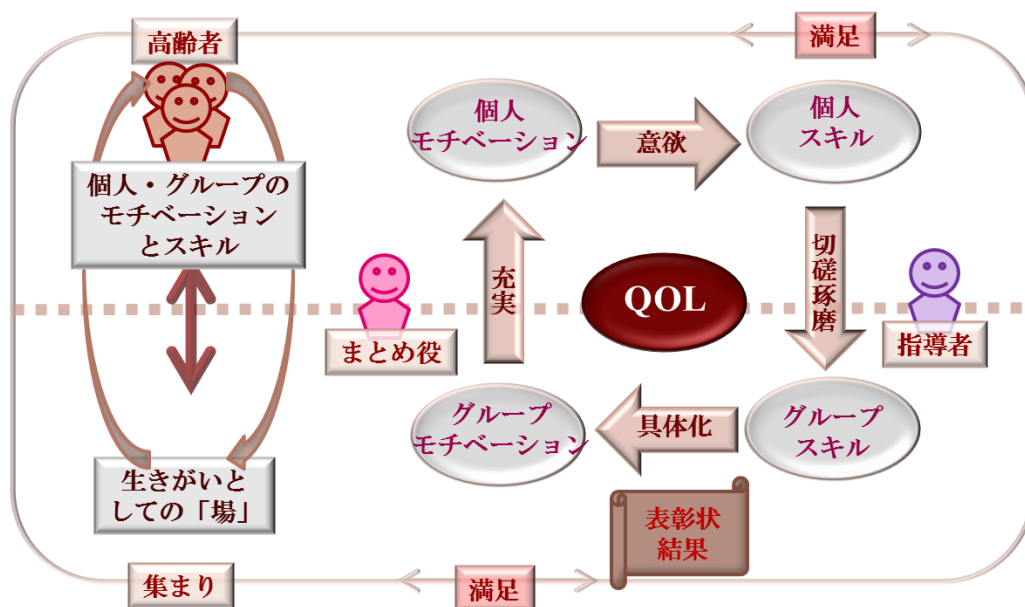


図 4-1 A 町の活性化促進モデル

■ A 町老人クラブの特徴

A 町の特徴は、各クラブを総括する指導役の「地区連合会長」の存在である。A 町を少しでも良くするため、まず自らが先頭に立ちボランティア活動を行い、地域とも深く連携して新聞の広告費も捻出している。個人ごとの町への貢献にも応えつつ 18 のクラブそれぞれが発展するため表彰制度を実施、「見える形」として印刷物に残す。地域内にとどまらず県や市、さらに全国老人クラブ連合においても受賞歴を残す活動成果を挙げるように指導し「会員の成果」を共通の目的としてグループのモチベーションを上げ、男女ともに多くの会員を地域に根付かせる工夫をしている。また、女性リーダーの育成に努め、優れたメディエーターとしてクラブごとに「まとめ役」を輩出する。このような取り組みを行っている A 町は、自分たちの町が暮らしやすく安全になるように、高齢者が団体としてのまとまりを見せている。連合会長は町全体の防災・安全を第一に、様々な企画を立て実行、まとめ役としてのリーダーを軸とした各クラブが連携し、結果として個人とクラブ内だけではなく A 町地区全体へのモチベーション向上・価値の向上も促す工夫を行っている。

A 町の事例では高齢者が元気に活動する活性化促進モデルが成り立っていた。

4.1.2 B 町地区交流センター：レクリエーション主体のデイサービス活動

B 町地区交流センターの活動は、介護保険を利用せず自力で通える高齢者に対して、交流やレクリエーションを主体とした登録制の「デイサービス」を行っている取り組みである。交流センターは、少子化で余った小学校の空き教室を用い、入浴・送迎を行わないデイサービスの施設へと改修、地域と連携した試みで設立された。

毎回の活動費用は 500 円、昼食とおやつ、材料費を含む。活動は週に 2 回、昼食をみんなで 5 時間行う。手芸工作などのワークショップと、レクリエーションとしてのゲーム大会、歌や早口言葉、詩や俳句作り、ヨガなど健康体操をベースとして、季節にちなんだ行事や、同じ敷地内の小学生と世代間交流も行う。毎回利用者全員に看護師資格者が検温・血圧測定を行い、健康手帳にバイタルチェックの記録も残す。交流センターの開始後、既に 12 年を越すが、はじめからの参加者も多数継続して参加・活動しており、結果として利用者の平均年齢は高く、現在は 82 歳である。現在 60 代の参加者はいない。活動内容に手芸工作が多いということもあり、参加者は女性が 20 数名、男性登録者は 1 名のみである。週に 2 回ずつ年間では 90 回にもなる活動を、高齢者が休まずに 1 人で通い続けられる秘訣は何か、他地区の自治体からも見学や訪問があるという交流センターを 2 日間にわたり訪問、見学・聞き取りを行った。

■ B 町地区交流センターの取り組み

この取り組みは地区のモデルケースとして開始、当初は 30 代だった指導者がプランを工夫し、世代間交流も続けながら毎週 2 回、12 年という多くの回数を重ねて続けてきた活動である。小学生との世代間交流の回数が多いことで、社会・道徳の教育も同時に行うことになり、B 町全体への良い環境作りへも貢献している。メンバーは、主に他者との交流を目的とし、週 2 回の決まった予定を楽しみに、生き生きと通っている。活動の性質上、個人で製作し、お土産に持ち帰るものが多い。早口言葉などは、メモに書き留めて家に持ち帰り、自主練習をすることもある。また、頻繁に行われるゲーム大会では、優勝者などを壁新聞に貼り出す工夫もしている。最近ではトーンチャイム演奏の指導も行い、小学生と協力して発表の場を設ける試みも始めた。

■ インタビュー

数名のインタビューから代表的なものを示す。

□ 参加者 H 氏

- ・大正 15 年生まれ、90 近いが、もう 12 年継続している。楽しいから。

□ 参加者 Y 氏

- ・40 年女性だけの職場にいたからわかる。ここが長く続く秘訣は、スタッフと皆（利用者）が本当に仲良しだから。

□ 参加者 T 氏

- ・健康が日課、朝の散歩と山歩き、夕方からは毎日必ず 37 年続けているプールで 500 メートル泳ぎ、その後にジムや水中ウォーキングも。自分の身体のこと自分しかしてくれないので。でもそれだけではコミュニケーションが不足してしまうと考え、ここに通いもう 10 年以上になる。ちょうど末年に交流センターに入り、また末年がきた。未は自分の干支でもある。（83 歳）

□ 看護師 M 氏

- ・利用者の平均年齢が高い。介護保険を使わず無理をしないかが心配である。
- ・テーブルは、好きな人どうしで固まるので気を配る。
- ・バイタルチェックの間のおしゃべりでは「人生の深い話」が聞けることもある。
- ・健康について、皆が指導をよく守ってくれ、インフルエンザなどにかからない。

□ 指導者 U 氏

- ・日々、次はどのような内容にしようか考えるのが日課になっている。
- ・利用者から難しいと言われると、どこが難しかったのか自分も新たな発見があり、工夫を行い改善する。
- ・参加者からは、逆に教えられることも多い。
- ・参加者のメンバーと町でバッタリ会うことがあるが、イメージが異なり見違えてしまう。皆、何を着ていこうか、化粧をして出かけようかと、おしゃれに工夫し、用意をしてセンターに来ているのだなと実感する。

■ 活性化の検証

このB町の事例が、活性化促進モデルにあてはまっているか、見学とインタビューをもとに検証した。個人が健康維持のため、また参加するためにも介護保険を使わないようにモチベーションを持ち、所属をする。既に長く参加している人は何でも上手い。それが刺激となり「より上手に作品を作り」「ゲーム大会では3位までに入り、自分も壁新聞の写真におさまりたい」とスキルを磨く。これが短期間であれば、グループスキルに発展しないが、12年もの継続により個人の技能は全体へと影響する。毎回の作品作り・鑑賞からは、他者の作品への講評やアドバイスも生じ、それはやがて「全員が上手くできる」技能・スキルとなる。見学時の活動では、羊の干支をモチーフとした手芸や色を塗って作るプラパン製作が行われていたが、花の色や羊の表情の出来を他の参加者と見比べ、自分の作品に対して何回もやり直してみたり、挑戦するといった姿が多く見られた。

指導者は、毎回異なるワークショップの計画を立て、1人ひとりが楽しんで作成できる配慮も行うが、通常はバイタルチェックを主に行うまとめ役も、健康講座とトーンチャイムの指導を担当している。健康講座やトーンチャイム演奏を行う時、指導者は参加者として活動をともしに行い今度は「まとめ役」に回る。トーンチャイムは、相手の音をよく聴き、タイミングに連携がないと曲が仕上がらない。そして、小学生との合同発表会を行うことで、地域に向けても発表・披露する。グループとして「小学生に負けないように頑張る」というグループの団結・モチベーションも生まれる。

また地域行事では、ちょうど餅つきを企画する時期であり、参加者の中から杵を子どもに教える担当者・捏ね取りの担当などが決められていた。「捏ね手は、餅がひび割れないようにする水分などのコツがあり、案外難しい」「子ども達に教えなければいけないから、できる(腕に自信がある)人を担当にして」「これが本当に“昔取った杵柄”だ」など、季節行事を通した世代間での交流であったが、真剣にグループ活動としてまとまろうと、参加者で討議する姿が見られた。

参加者は週2回必ず会う仲間や、指導者・まとめ役とのコミュニケーションを通し、様々な作品作りや早口言葉の自主練習、ゲームの勝敗においても各自でスキルを磨き、壁新聞やゲーム表彰などの成果をモチベーションとしていた。また頻繁に行われる世代間交流や季節ごとの行事を通し、活動の様子が地域の新聞や広報ページにも掲載されることで「B町地区交流センターのおばあちゃん・おじいちゃんチーム」という「顔」

になっている。このような「成果の見える活動」がグループを団結させ、リーダー・まとめ役の支えは個人・グループのモチベーションになる。地域や小学生にも良い場を見せることになり、築いた“生きがいの場”として驚くほど長い、持続・活性化した活動を形成していた。

図 4-2 に示す。

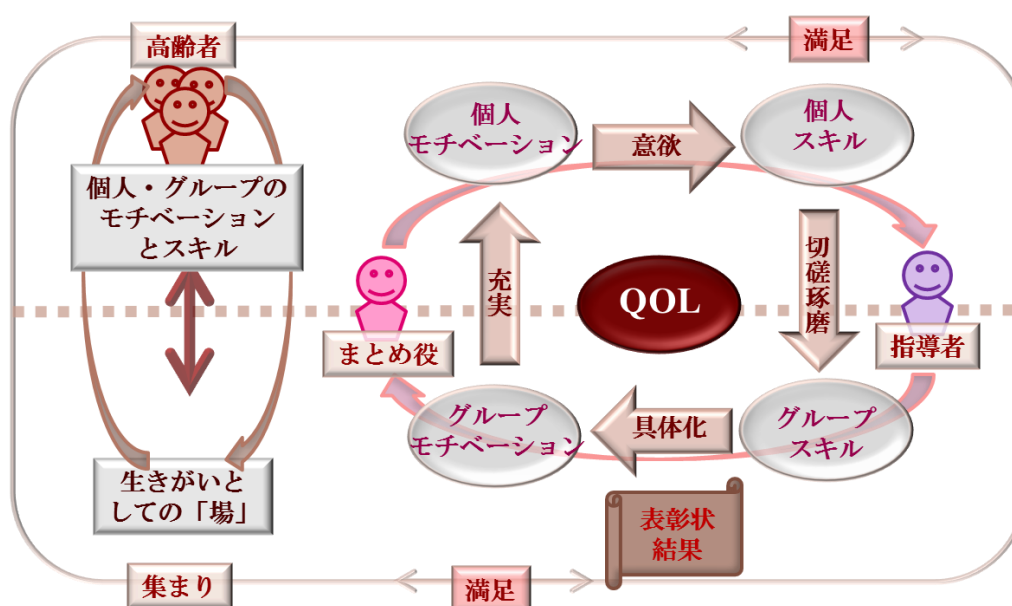


図 4-2 B 町の活性化促進モデル

■ B 町地区交流センターの特徴

B 町での「活動の成果」は、自治体の新聞・壁新聞・小学生の社会研究としての壁新聞の他に俳句や手芸の展示など「見える形」の種類が多い。グループと個人の写真が掲載されることで、「B 町地区交流センターのチーム」として、団体としての団結が確立していた。

「あなたにとってB 町地区交流センターはどんな場？という、利用者に行ったアンケートでは1 位が「生きがいの場」で88.9%であった。（センター紹介パンフレットより）利用者は皆、雨の日も雪の日も、天気に関係なく自転車や徒歩で通い、風邪で休むことも少ない。うがいや手洗いの徹底、予防接種の呼びかけ、適切な水分補給についての知識や、呼吸法・気功など健康講座実践の効果が表れているということだった。そのために活動内での感染症が1 度も起こっていない。

さらにB町の特徴は、まとめ役が場面により指導者にもなることだ。2人の指導者が交互にまとめ役にもなり、役割を分担させながら連携をはかって「楽しく続く工夫」に力を注ぐ。片方が常に参加者と活動を共にすることで、双方ともにメディエーターとして活動していた。

活動の内容じたいは、色々な地域コミュニティで実施されているものと同じ内容が多い。しかし、平均年齢80を越える同じメンバーが継続して年間90回もの集まりを10年以上継続させるためには、「居心地の良い場」と、その環境を維持させる、優れたまとめ役が存在が不可欠となる。B町では“地域の顔”の位置づけともなるグループ活動と、指導者・まとめ役が、活動によって役目を交替することで参加者・小学生や地域にも価値を提供していた。充実した活動は、たとえ天気が雨でも雪でも「休まずに出かけよう」というモチベーションとなる。B町の事例は、健康で生きがいを持ち、活性化促進モデルが、しっかりと循環していた。

4.1.3 C区歌声サロン：住民互助としての“ふれあいいきいきサロン”

C区では、民間委託管理会社が運営・管理してデイサービスを行う旧福祉会館の会場に、2014年6月以降、5つのサロンができた。地域包括ケアシステムの「互助」としての試みである。そのうちの1つ「歌声サロン」の発起人は91歳、自ら活動の会場の使用交渉を行い実現した経緯がある。活動は月に1回午前中の2時間、指導は発起人と同じ老人クラブに属する音楽指導経験者が行い、かつて学校で習った唱歌や童謡を中心に歌う。参加は無料で申し込みや登録も不要、好きな時に気楽に参加できる場を提供している。開始時には発起人が所属する老人クラブメンバーが主体となり声掛けを行ったが、区内在住の60歳以上は誰でも参加ができるように告知しているため、クラブ所属者以外の単独または知人との参加者も多い。開始した6月以降、月1回の開催を入口のポスター告知だけで行っているが、毎回30人近い参加者で部屋がいっぱいになる。カラオケ以外の歌の集まりは女性が多くなりがちだが、最初1名だった男性も4～5名に増えてきている。

この事例には開始時より毎月同行している。

■ C区歌声サロンの取り組み

このサロンは発起人がまとめ役であるが、地域で長く書店経営をしていたために地

元の“顔役”となっており、知り合いが多い。また、リタイア後に高齢者の集まりへの外出機会が多くなったため参加者からの感想を得やすいこともあり、参加者の毎回の感想や希望は、必ず指導者に常に伝えている。

指導者は、高齢者の馴染みのある曲を用意し、調性も変えるなど毎回工夫している。

開始半年後の12月、それまで歌ったものから10曲を選び、地域包括センターの拠点となっている特養ホームで出張コンサートを実施した。利用者の男性が切り絵を作成し提供、その画像をパソコンに取り込んで表紙にし、歌詞集を作成して参加者に記念として配布した。この時の参加者は17名、聴衆は主に、特養ホームのデイサービス利用者と入居者15名だった。発表は四季順に選曲した唱歌と最後に「きよしこの夜」で終了、会場から参加して歌っても良い、というスタイルだった。夏の曲「われは海の子」からは、男性観客をはじめとして手拍子をうつ人が増え、会場が一体となり手拍子で参加する姿もみられた。参加者側は「初めて人前で歌う」という人がほとんどであったが、40分ほどのステージ後、聴衆が控室に訪問、「お礼、感想」の声を届けに訪れるというサプライズもあり、成功のうちに終了した。

■ インタビュー

コンサート当日の自主的な声を示す。

☐ 参加者女性A

- ・顔が赤くなっていた。いつもと違い血のめぐりが良くなったのか、楽しかった。
- ・観客の反応がとても楽しそうで良かった。

☐ 参加者男性B

- ・人の前で歌ったのは中学以来だ、少し緊張した。

☐ 参加者女性C

- ・実は会場に来る前、娘に『老人が老人に一体何ができるというのか？』と咎められた。こんなに皆が喜んでくれたのだ、ということを帰宅して娘に堂々と伝える。

☐ 聴衆女性D

- ・本当に懐かしくて嬉しくて涙が出た。

- ・自分はこの町で生まれ育ち、空襲もここで経験した。空襲の時には、近隣の大きな寺に避難した記憶もある。
- ・これを聴けたから、また頑張って長生きができる。

□ 聴衆男性 E

- ・色々な人がコンサートに来るが、知らない曲ばかり、今どきの歌はわからない。
- ・今日は懐かしく知っている歌ばかりで本当に楽しかった。ありがとう。

■ 活性化の検証

このC区歌声サロンの事例は、半年で活性化促進モデルにあてはまるのか、開始時から7回行った全活動と発表の場への同行、そしてインタビューも通して検証した。C区のこのブロックは、地域行事や老人クラブが活発であるとは言えない。ひとつには世帯ごとの生活様式が非常に多様なこと、地域密着型の活動も少ないことがある。そんな中で歌声サロンは技術を問わず、一見の人が歌えなくとも気楽に参加できるスタイルをとっていた。しかし回を追うごとに参加者からの「もっと教えてほしい」「歌詞だけではなく、楽譜も読みたい」という声も上がるようになり、参加者は常連となり、毎回熱心にメモをとる人の数も増えてきた。指導者は毎回必ず、まとめ役が集めてきた感想を聞き、選曲を変化させ、楽しい中にも参加者が望む「学習」となる内容を必ず盛り込むように工夫している。参加者個人は、コミュニケーション目的で「行動」を起こしたが、自らの声や歌い方を「より良くしよう」「曲について知りたい」という自己追求から、技術・知識のスキル向上を望むようになり、メモをとり講座を録音して質問を活発に行うようになる。次回まで1か月の期間が待ち遠しく、必ず次も参加しようという「モチベーション」が循環する。このC区の事例は発足から半年、7回の活動ですぐに発表の場が行われたことになる。しかし、発表の場が設定されたことで、短期間に個人スキルとモチベーションだけの循環からグループスキル・モチベーションを伴った循環へと変化の兆しがあった。また参加者だけでなく、指導者・まとめ役もこの発表により思いがけない交流の機会を得た。この「成果」が大きな充実感となり、サロンにグループとしてのまとまりが生まれた。個人の生きがいの場としてスキルとモチベーションを持った活性化促進モデルがスパイラルとしての循環を始めた。 図 4-3, 4-4 に示す。

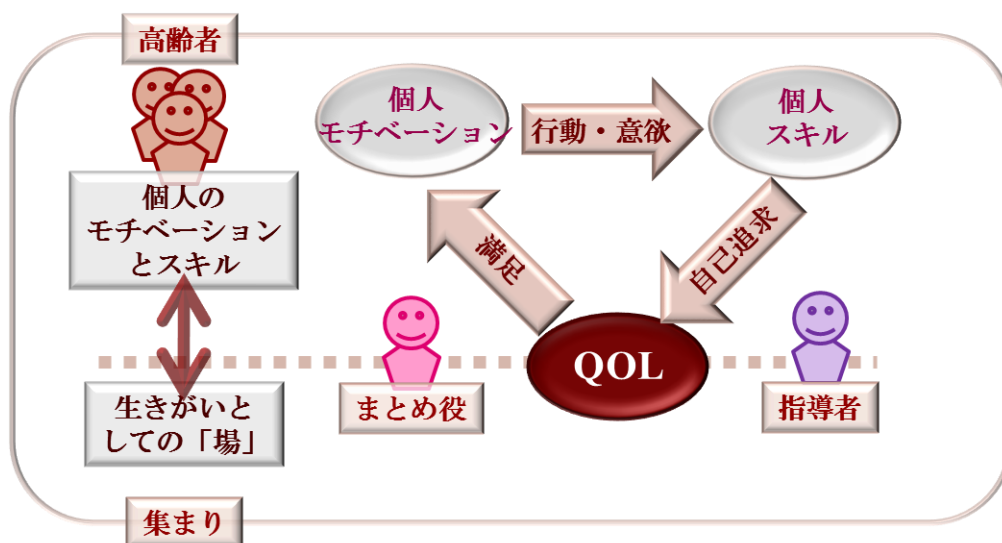


図 4-3 C 区歌声サロン（発表前）

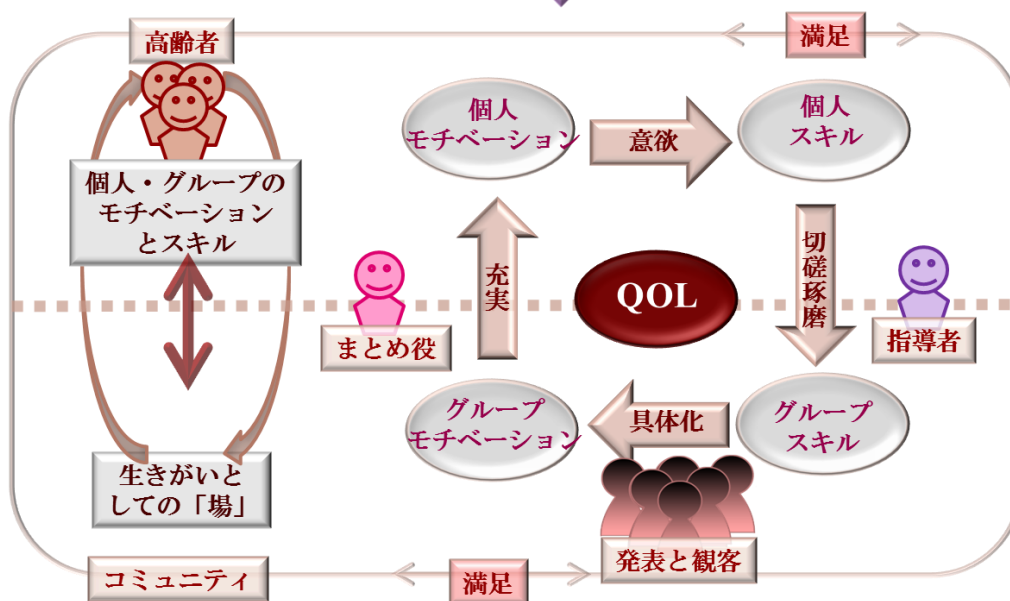


図 4-4 C 区歌声サロン（発表後）の活性化促進モデル

■ C 区歌声サロンの特徴

C 区の中でも、歌声サロンのあるブロックは、区内でも個人の地域との関わりや行事が少ない。参加者の大半は終了後どこかに集まり親睦を深めることもなく、互いに名前も知らないケースも多い。A 町・B 町の事例とは大きく異なっている。このよう

な参加者同士のコミュニケーションが少ない集まりにおいて活動を活性・継続させるためには、地域でまだ活動に参加していない知人を誘い、毎回の感想や反応を指導者に細かく伝えるまとめ役と、高齢者が懐かしく歌いやすい曲を用意し、次への参加につなげる指導者との連携が重要となる。特養での発表の場は、C 区内に居住する参加者・聴衆双方へ「同じ時代を過ごしてきた共通の記憶」という価値も与えた。わずか7回の活動であったが、「同じ目的を持ち挑戦した成果」は、参加者の記憶に残り、グループとしてのモチベーションやスキルに大きな変化が表れた。自主的に難しい曲に挑戦する様子、楽譜の片付けに協力する参加者、サロンをきっかけに色々な交流の進んだ様子も見える。このサロン活動が回を重ねた時、「団体としてのモチベーション」はさらに変化するのか、今後継続して検証を行いたい。

4.2 データ収集と検証

4.2.1 指導者・まとめ役へのインタビュー

これまでの4つの事例では、指導者・まとめ役が2名ずついた。1名は「指導役」として、活動の場の予定・方向性・練習や企画などのプロセスを組み、参加者のスキル向上へと導く。もう1名のまとめ役は、参加者と指導役をつなげる役目を行う。このような高齢者の自主的・互助的な集まりにおいては参加者側の要望や意見、気持ちなどを聞きとり、まとめ役が指導者に伝えることが必要となる。まとめ役が、参加者側の立場から「メディエーター」としての役割を発揮していることが、活性化する活動において重要なポイントとなっていた。

また4つの事例では、指導者がまとめ役を兼ねたり、まとめ役が指導・コーチに携わることもあった。J管弦楽団とC区歌声サロンでは、指導技術に専門性があることから、場合によっては指導役がまとめ役の領域へアドバイスを行う工夫も見られた。A町老人クラブとB町地区交流センターでは、まとめ役が、活動のコーチに関わることもあった。指導者の教える技術や知識を参加者にうまく伝える役目として、まとめ役は、ある時は指導者の教えるコーチにもなる。指導者もまとめ役がいない場合、参加者に自分の意思を伝え、場の環境にも気を配る。活性化した活動を行っている“生きがいの場”では、指導者とまとめ役の連携ができていた。

活動における参加者との関わり方、特徴を検証するため、この4事例のリーダー・まとめ役8名に対して同じ質問を設定し、聞き取りを行った。このインタビューでは“参加者をまとめる”という観点から、全員に対して“リーダー的存在”という前提のもとで7項目の同じ質問をたずねた。表4-1に示す。

事例別 リーダー まとめ役	J管弦楽団 指揮者	J管弦楽団 団長	A町老人クラブ 地区連合会長	A町老人クラブ 女性委員長	B町地区交流セ ンター 指導者	B町地区交流 センター 保健指導	C区歌声サロ ン 指導者	C区歌声サロ ン 発起人
経歴	音楽家・指揮者 現在→指揮者 男性78歳	会社員 現在→現役 男性58歳	公社勤務 現在→定年退職 男性70半ば	主婦 現在→地域役員 女性65歳	主婦 現在→民生委員 女性47歳	看護師 現在→ボラン ティア団体主催 女性52歳	ピアノ教室主催 現在→現役 女性79歳	自営業3代目 現在→80で引退 女性91歳
質問項目								
①リーダーとしての経験はいつから？	中学からブラス部長・バレエ部部長など、他部活も選手兼任	7年前にJ楽団の団長が初めて	学校では級長PTA	小学校から委員長ほか、地域では常にリーダー	PTA（主婦）以降色々な長になる	学校で、学級委員長	小学校6年級級長中・高で合唱部立ち上げ部長・NHKコンクールへ、陸上部部長	地元で代々続く家を、幅広い人と交流があった、自然と地域の相談役に
②自身が多く外出する主な目的は？	演奏会でも組織との人間関係のつながり重視 コミュニケーション第一	自分の楽しみのため	行事の「役目」が主だが趣味の楽器演奏もある、ほとんど家にはいない	役の関係と趣味のダンス、友人の相談事やコミュニケーション、	センターの他に民生委員活動、今年からは町内会長に	趣味の音楽でボランティア活動を行う	地域の人々と親交を深めるため、あとは主に仕事と、知人の音楽会鑑賞や自分の発表会主催	主に健康のため人との関わりも勉強になるようや自分の時間ができ習い事で自分探しを
③周囲へ活動への参加を促す声掛けの理由は？	音楽好きにできるだけ情報を流す、聴衆あつてこそ練習した演奏の意味がある、接点作りをする	多くの人に見て聴いてもらいたい、演奏会へ聴衆として誘いつつ楽器経験者には入団も声掛け	転入者などつながりがなく、積極的に声掛け、新聞配布もきつかけになる	勤務・アピールし、コミュニケーションをはかる。友人と同じ行動・活動をしたから	勤務は他者の仕事なので、自ら連絡はしない、利用者が休んだりした際や相談には連絡する	特にしない	趣味が同じ人といっしょに楽しむため、一人でも多くの人に集まってもらいたい	外出しない人、集まりを嫌がる人は、表情も暗い、うまく連れ出せれば以後、参加するように
④活動において気を配っていることは？	組織が常に安定すること、ファンとの多い団体にする、人間関係のつながりや各ポジションの機能	人間関係 最大時は60人いるので	地域の情報のため仲間を広げる会員の健康状態や、活動の表彰などに気を配る	若手（70以下）の活躍を推進する。皆が楽しいと思えるものへ	全員に対し帰るまでに1回は笑ったか？1人である人には話しかける、話しかけやすい雰囲気、作業レベルにも配慮	皆のテンションをハイテンションにすること、健康に気を配ること	少しずつでも皆に楽しむ以外に知識向上をと考えるが、難しいのが嫌な人、意欲的な人と嫌々おり、兼ね合いが難しい	1人でも多くの人に懐かしい曲を楽しんでもらいたい
⑤活動を行う中で「楽しかったこと」は？	聴衆とステージが合体し同じ空間を共有できた時、ミスがあっても十で結果盛り上がった時	定演が、無事終了すること（多くの聴衆・拍手・アンコールを得て）	①会員から感謝の言葉をもらって、やっていて良かったと感じる、②まずは自分が地域への恩返しとして奉仕する	①皆が感謝して喜んでくれること、②リーダーとしての人材が育つこと	①楽しい笑顔を見ると達成感がある。②手紙をくれる人も、自分が辛い時には読み返してみる、③辞めると相談されても次に来てくれたとき	①感染症、インフルがないこと、②健康手帳に「返事」を一筆書いてくれること、	①参加者が楽しかったと言ってくれた時、②クラシック名曲演奏でも、あれほど喜んでくれない、唱歌で涙を流すほど感謝されて嬉しかった	多くの人が、自分に何でも相談などしてくれること、その結果良い状態になってくれること
⑥活動を通して自分の生活・考えへの変化は？	はみ出したオケを見ると良くしてやろうと思う。皆が進化し同じ方向に向かうように、常に前回よりも充実したもののへ	日常生活よりもオーケストラ活動に重きを置いていたと思う	地域を知り人間関係の調整をはかる自分自身も助けてもらえ。お世話させていただいて良い方に解釈する思考になった	人のことをさせてもらって自分を完成させられる。ボランティアも自分の勉強となり、自らに還元される。	開始当初は、ただ必死に取り組んできた。今は皆の不安をどれだけやわめられるかを心掛けている。肩の力が抜けた	現在腹理の情報に気を配りタイムリーなものを取り入れるようになった。（高齢者指導用の月刊誌などで）	高齢で色々なサークルに参加している人を見ると元氣だと思え、自分も仕事の合間にできるだけ参加したい、曲を調べ昔の歌詞を思い出した、	毎日毎日を充実できるようなので、ストレスをためず、家族とも仲良く、健康に気を遣うようにしている
⑦今後企画したいと思うこと	聴衆がより喜ぶプログラムを。あたたかくホットな演奏会ができるように、	①オペレッタ ②舞踏会 ③海外公演 ②と③は実際に企画中	要介護者やグループケアシステム、街づくりを形のあるものに（現在は絵を描いた冊）災害時の対応強化	多くの人が楽しめるもの、拡大できるもの、	異世代間交流をもっと行いたい、スタッフを育てたい（今まで全く休めなかったが休んでも大丈夫なように）	異世代間での交流演奏	オーケストラの伴奏で唱歌が歌えたら、皆喜ぶと思う	年をとった皆が誰でも楽しめるもの、声を出すこと・笑うこと・聞くこと

表 4-1 「リーダーとして」指導者・まとめ役への7つのインタビュー

4.2.2 インタビューの検証

4事例においての指導者とまとめ役2名ずつの“リーダーたち”は、8名中7名がいずれも若いうちから既にリーダーとして活動し、コミュニケーションのための外出も多かった。

自分たちの周囲へ参加を呼びかける声掛けも積極的に行い、参加者1人ひとりが楽しく活動できるように配慮している。また活動中での人間関係に気を遣い、活動の場の環境を良くしようという意欲を持つ。自らの意欲は、活動を通して得られる参加者からのフィードバックが活力となっている。そして現状をさらに改善する試み、新しいことへの挑戦、良い活動の企画などを常に頭に置き活動にあたっていることが、8名全員に共通していた。

この8名のうち、3名は、まだ前期高齢者という年齢ではない。参加者に対して「先輩であることの敬意」を持ち、自らも活動を楽しみながら「先輩」から学び、それを改善に活かして活動の場がより良くあるよう常に心がけていた。そして、3名とも活動を行う中で自分が前期高齢者になった時のビジョンを持ち、それを楽しみに活動を進めていた。5名は、参加者と同じ世代、もしくは先輩であり、互いに共感し合いながら「もっと皆を元気にしたい」という意欲を持って積極的に活動していた。

4.3 高齢者のモチベーションとスキル

4.3.1 個人活動と分類

高齢者が通常参加する様々な活動において、モチベーションとスキルは「高齢者個人」に対してどのような位置づけとなっているのか、身近な活動を分類した。

- 個人または少人数で行うもの：自然や物を対象とした自主的な活動であり、指導者もまとめ役もないもの ―釣り・写真・美術・工芸・手芸・マラソン・水泳・ハイキングなど 図4-5に示す。

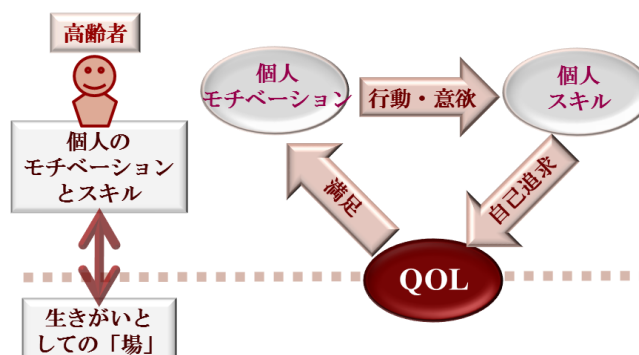


図4-5 個人活動型

- 習い事や講座として指導者と1対1、または指導者1対複数で、教室などを用いて行うもの 一語学・楽器・民謡・舞踊・健康教室など 図4-6に示す。

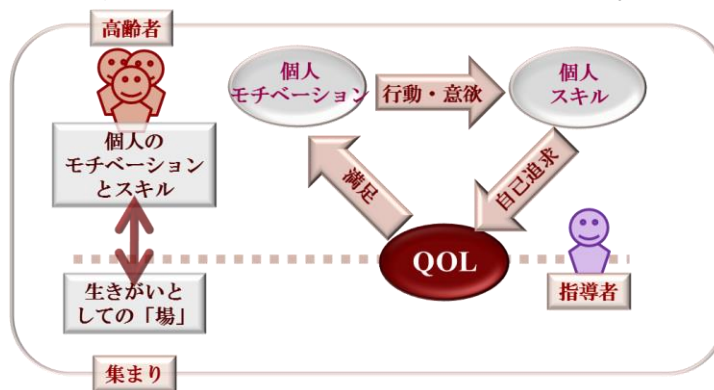


図4-6 習い事型

- 複数で行い、日にちや場所を決めるため、まとめ役はあるが、指導者はいないもの 一囲碁・将棋・料理・カラオケ・同好サークル・老人会など 図4-7に示す。

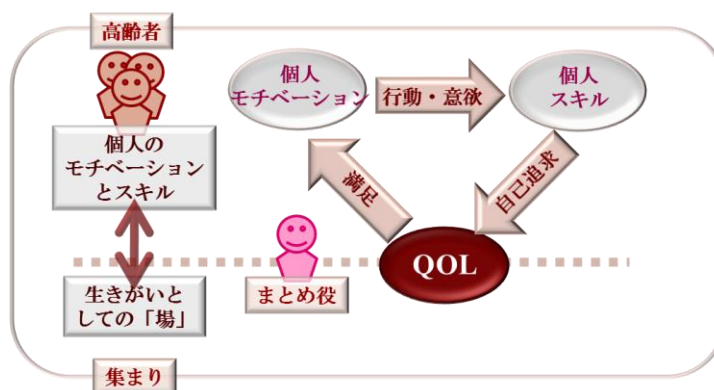


図4-7 老人会型

- 複数で行い、日にちや場所を決め、指導者もまとめ役もいる集まり 一スポーツサークル・サロン・ボランティア活動など 図4-8に示す。

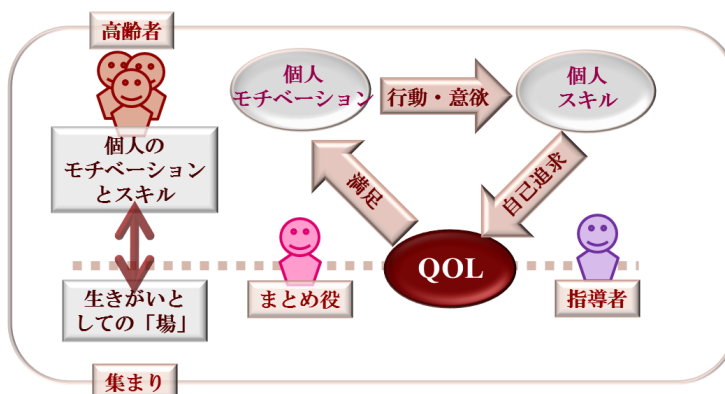


図4-8 サロン型

4.3.2 指導者・まとめ役の有無と高齢者の活動

アマチュアオーケストラの活動では、指導者とまとめ役＝メディエーターの存在が、個人のモチベーションとスキルを支え、活動の成果としての「演奏会の成功」という共通目的においてグループがまとまり、“生きがいの場”が個人のQOL向上となってグループも持続・活性化する、という活動を行っていた。

前述の4つのパターンでは、「グループとしての成果」演奏会や勝敗・表彰状などグループでの成果を目標としないという活動を挙げた。個人の動機が行動となり、技術を向上しようとする。個人の活動の成果が満足としてQOL向上となり、生きがいを形成、活動する対象の上達を求めてモチベーションが循環するというモデルである。

指導者とまとめ役の関わりがあるかないか、の2軸に分けて図にまとめた。

図4-9に示す。

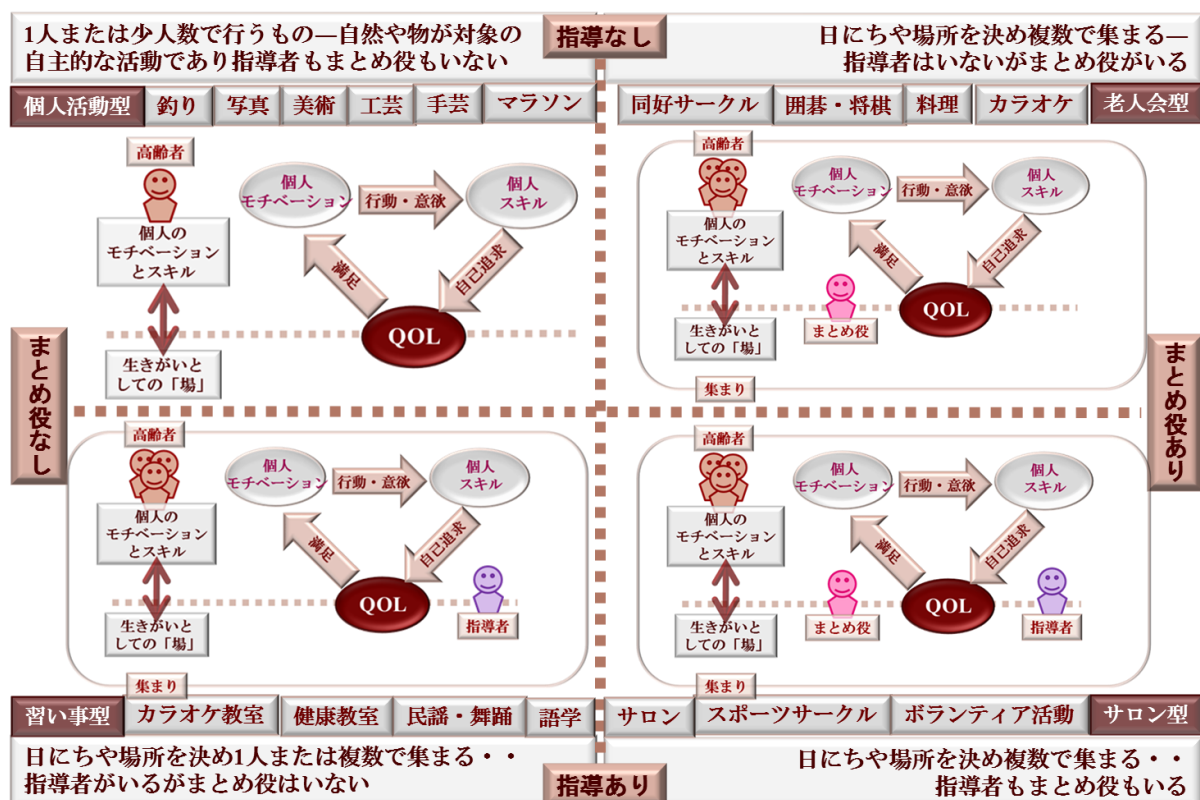


図4-9 指導者・まとめ役の有無と、高齢者の活動分類

4.4 考察

4.4.1 活動における成果の役割（発表か勝敗か）

C 区 歌声サロンの事例は開催半年の期間までは図 4-10 の「サロン型」であった。毎回の活動自体の満足はあり、参加者の求める「技術向上」「知識向上」「楽しさ」は十分満たされているが、参加者の「長期記憶」としてはっきりと残るような「明確な成果」はなかった。この事例では特養での発表後「皆で共通の目標に挑戦した」という連帯感が生まれ「達成感」が個人の強い記憶となって残った。単独参加であった参加者の間にも、同じサロンに集う「グループ」としての会話や指導者・まとめ役への感想が増えるなど、グループ内の距離が近くなったことが見てとれた。特にまとめ役が長年、地域の顔であることで、知人どうしを強くつなぐ効果もあった。

C 区の実例は、発表という「成果」をきっかけに、グループとしてまとめ、また次の発表を目指し、新しい曲に皆で挑戦するというグループスキル、グループモチベーションへの変化があった。

A 町老人クラブと、B 町地区交流センターは、活性化する「共通の目標・成果」がグループとしての新聞掲載・表彰にあった。写真や表彰結果が掲載された新聞は、各自が所有できるものであり、活動成果は個人の達成感と共に長期記憶として残る。

A 町の実例は、連合会長のアイデア・企画・指導などの実行力が特に大きく、まとめ役には女性視点からのまとめを任せることで連携をはかっていた。

B 町の実例では、まとめ役がアクティビティの指導も兼ねるほか、参加者に対して長期間行う健康面でのサポートが特に大きく、良好な環境に貢献していた。

アマチュアオーケストラの活動も含め 4 事例は、全て「グループとしての活動の成果」が共通目標となり、達成感はグループの価値、さらには地域や観客への価値も共有していた。“生きがいの場”に生まれた「成果」は、持続・活性化した活動を促進し参加者個人の「価値」ともなり、QOL 向上・生きがいに寄与していた。

各事例の活性化モデルを発表・表彰の軸、指導者・まとめ役の重要度の軸に分け、一覧で図 4-10 に示す。

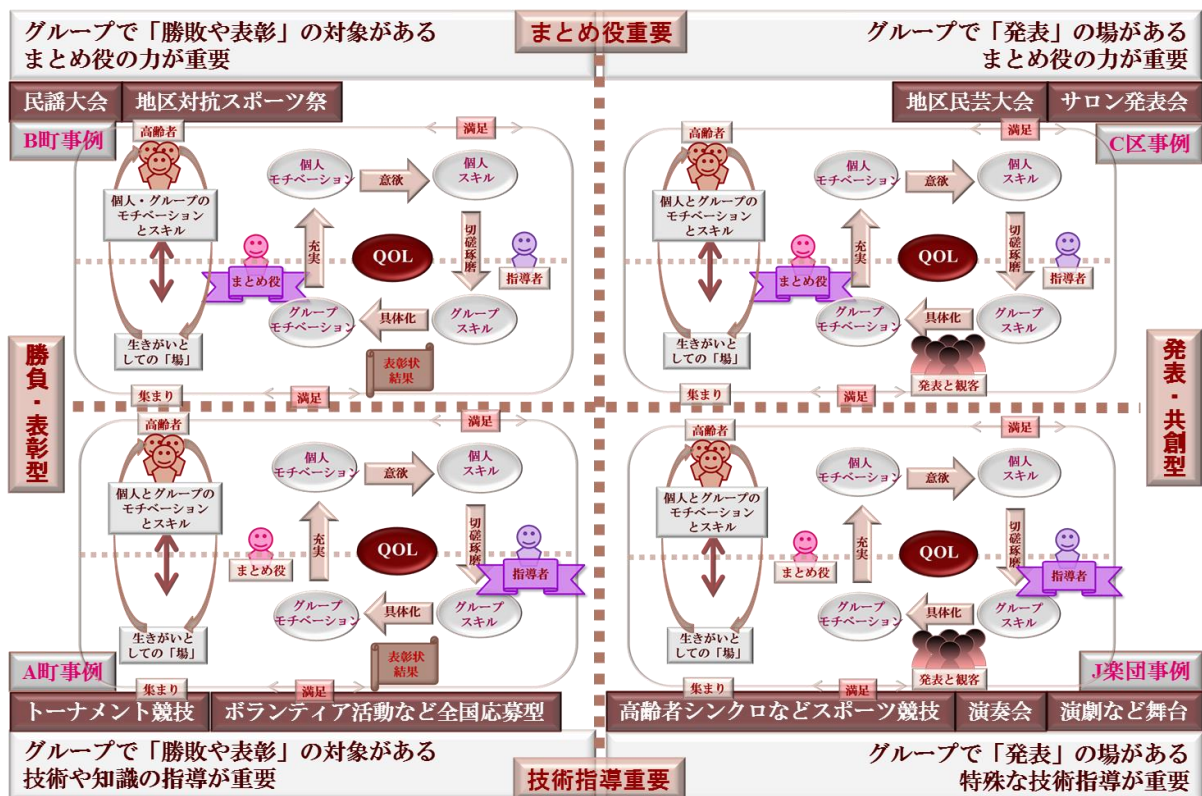


図 4-10 活動の発表・表彰と、指導者・まとめ役の関わり

4.4.2 スキルとモチベーションーオーケストラ活動と比較して

高齢者は技術向上心が高い。J 管弦楽団の場合、良い演奏が年々ファンを増やし、リピーターとしての聴衆が会場をいっぱいにしていった。しかし、このような技術向上心の高い傾向はオーケストラの楽器演奏という特殊スキルに限ることなく、どのようなアクティビティにおいても見られた。A 町老人クラブは、ボランティア活動に限らずグラウンドゴルフでも市・県・全国と常に上位を目指している。個人の体力作りと、グループのチームワークが成果となり、表彰結果という価値を共有していた。B 町地区交流センターは、平均年齢が 82 歳という集まりであるが、手芸で作る動物の表情ひとつとっても他の参加者と比較し、やり直す気概を見せていた。新しい会員は皆に早く追いつくために、早口言葉もノートに書き写し自宅であらかじめ練習していた。C 区歌声サロンは歌の意味や歌い方など、毎回のノート記録やカセットテープ録音をする参加者もいる。どの活動においても、参加者は自主的に普段の生活の中に復習な

どを取り入れ、活動で得た技術・知識としてのスキル定着を自らの価値とし、QOLを向上させ、次回参加へのモチベーションとしていた。

4.4.3 指導者(リーダー)と、まとめ役(メディエーター)

4 事例において、「場のまとめ役」は同時に参加者でもあった。このような高齢者の自主的・互助的な集まりにおいては特に、参加者側の要望や意見・気持ちなどを聞きとり、指導者であるリーダーに常に伝える役目を行う人が必要となる。自らも技術や知識を教わりつつ、指導者の知識や言いたいことを参加者にわかりやすくフォローし、指導者と参加者との橋渡しを行う。さらに参加者の健康含め、場の良好な環境維持にも努めるマネジメントの役割も果たす。このように、活性化している4事例のまとめ役は、翻訳者・仲介者としても理想的な「メディエーターの役目」を果たしていた。

メディエーターは常に参加者の立場に立ちながら、場の問題解決にあたり、ある時は新しい試みの工夫も提案し、参加者にとって「価値」となる場を提供する。指導者は、まとめ役と連携することで、参加者の生の声も聞ける。3者がそれぞれの立場で連携した、まとまりのある良い環境の場は、持続・活性化した活動を促進する。充実した活動は参加者、指導者、メディエーターという3者のQOL向上・生きがいともなり、価値の共有が生まれる。

メディエーターの存在は、持続・活性化した活動のスパイラルを行う上で、参加者と“生きがいの場”の価値共有を促す重要な位置付けであった。

4.4.4 活性化モデルと価値共創の議論

アマチュアオーケストラ活動の事例分析で得られた活性化促進モデルは、参加者のスキルを指導者が支え、モチベーションをメディエーターが支えることで個人・グループのモチベーションとスキルが循環する。A町老人クラブ、B町地域交流センター、C区歌声サロンの事例分析においても、持続・活性化する場の条件として当てはまることが検証された。

4事例の持続・活性化している活動には、共通の目標と活動の成果があり、この「成果」がグループの価値、さらには個人の価値になっていた。成果のうち、勝敗や表彰の新聞掲載は、地域において未来の参加者へのモチベーションともなる。発表は、同

じ世代の聴衆・観客へも価値を提供する。持続・活性化している活動は、参加者だけではなく、活動の外・地域や社会に向けても価値提供を行っていた。

活動で得られた個人のスキルは、個人の価値になるとともに、仲間との切磋琢磨でグループ全体の価値にもなる。4事例はそれぞれ「成果」を出すための共通目標を持ち、目標に向けてグループのスキルを上げることが全員のモチベーションとなり、活動を行うことの価値となっていた。

また多様な参加者が集まる集団の場においては、場の環境と活動のモチベーションに働きかけるメディエーターの存在が、持続する活動の場にとって大きな価値となっている。参加者の立場でもあるメディエーターは、参加者に価値を提供し、指導者とも価値を共有する。その活動の中で得られたフィードバックを自らのモチベーションとして自分自身にも価値を共有していた。

活性化促進モデルは、参加者・指導者・メディエーターがグループの共通目標に向けスキルとモチベーションをスパイラルアップさせる価値共創モデルとなっていた。

第 5 章

ま と め

高齢者が持続・活性化している活動を事例分析し、価値共創モデルを構築した。この章では本研究で得られた結論を述べる。

5.1 リサーチクエスションに対する回答

5.1.1 サブシディアリー・リサーチ・クエスション(SRQ)への回答

本研究では、以下の 3 つにサブシディアリー・リサーチ・クエスション(SRQ)を設定した。それぞれに回答を行う。

SRQ1: 高齢者の社会活動が持続・活性化するには、どのような価値共創の場が必要か？

SRQ2: 価値共創の場において、高齢者の技術向上は、いかにモチベーションに結びつくか？

SRQ3: 高齢者の社会活動を持続・活性化させるために、メディエーターの果たす役割は何か？

- SRQ1: 高齢者の社会活動が持続・活性化するには、どのような価値共創の場が必要か？

J 楽団では充実した活動の継続から、年々固定ファンとしてのリピーター、観客動

員数も増加している。良い演奏を行うことで、団員と聴衆それぞれへ価値が提供され、演奏会が大きな価値共創の場となっていた。聴衆からの盛大な拍手、「ブラボー」の声かけ、招待した知人からの評価や感想なども「技術向上を確認できる成果」として、また1年後の演奏会・新しい曲へのモチベーションにつながり、団体として持続・活性化した活動を行っていた。

C区歌声サロンでは特養へ出張コンサートを機に、同じサロンに集う仲間としてのまとまり・意識の高まりがみられ、サロンという「場」に団体としての価値が生まれた。また聴衆が感動してお礼・感想を述べに訪れるなど、発表を行ったことで同じ地域に住む高齢者が交流する機会も生まれた。サロンの団体としても地域住民としても、双方への価値共創となった。

A町は、団体としての成果が全国表彰にもつながっており、団体の価値となっていた。表彰結果も、各老人クラブの活躍も、全て新聞掲載により「見える結果」とすることで、個人のモチベーション形成にも寄与し、地域に根付いた持続・活性化の活動となっていた。

B町は、ゲームの表彰などで個人の成果物としての価値もあるが、団体としての地域活動・異世代間交流発表にものぞみ、これも新聞などの掲載で「見える結果」が価値としてある。特に季節行事などの異世代間交流では、「餅つきは子どもたちより上手くできる」「高齢者として昔の知識を子どもたちに伝えたい」という張合いも生まれ、団体としての価値共創の場となっていた。

このように高齢者の持続・活性化する活動は、

(1)発表を伴い「グループの共創と、聴衆としての他者との共創が成果」としてあるもの

(2)何らかの勝負などで得る表彰状や新聞掲載など「見える成果」があり、これがグループの共創につながるもの

この2点を伴うことが挙げられる。このような発表または評価・勝敗などがあると、グループで共通の目的ができ、技術向上が目に見えて確認できることで、活動の努力が価値として評価される。活動の評価はグループ内外への価値共創も生み、「次の新しいことへの挑戦」という活動の持続・活性化につながっていた。

- SRQ2: 価値共創の場において、高齢者の技術向上は、いかにモチベーションに結びつくか？

J 楽団の活動では、何よりも自らの演奏技術と団体としての演奏技術向上が望まれていた。「定期演奏会」という共通の目標の中において、練習過程での技術向上がグループの共創の場となる。1年間の集大成として演奏会での技術向上は達成感・充実感となり、個人とグループそれぞれのモチベーション・活性化へと繋がっていた。他3事例の活動においても、高齢者は技術向上心が高いことがわかった。主に知人からの誘いなどで活動に参加しようというモチベーションを持つ。参加したそれぞれの活動において、先に活動していた他者・共に参加した知人などを意識しながら意欲的に取り組む。グループで行うことにより「もっと上手く」と互いに比較し切磋琢磨することで団体の中で価値共創が生まれる。そして共通の目標を達成するために個人の技術・グループの技術も向上し、グループの充実が個人の生きがいとなって再びモチベーション・活動の活性化につながっていた。

- SRQ3: 高齢者の社会活動を持続・活性化させるために、メディエーターの果たす役割は何か？

「場のまとめ役」としてのメディエーターは、同時に参加者でもある。自らも指導者・リーダーに教わりながら他の参加者へ指導者の意思をわかりやすく伝え、指導者にも参加者の意見や要望を伝える。多様な参加者が集まる集団において、場の良好な環境維持にも努めマネジメントの役割も果たす。

その上で参加者に「次回も必ず来よう」というモチベーションを起こさせ、メディエーター自身も参加者のフィードバックを自分のモチベーションとして次の活動に活かす。

メディエーターの存在は、持続・活性化する活動において重要な位置付けであった。

5.1.2 メジャー・リサーチ・クエスチョン(MRQ)への回答

本研究において得られたメジャー・リサーチ・クエスチョン(MRQ)への回答を行う。

- MRQ: 高齢者の活性化促進に結びつく価値共創モデルとは、どのようなものか？

現在、高齢者は多くの自治体・またはサークルなどで自分の能力や経験に合った多様な活動を選べるため、その中で自身の知識を増やしスキルを向上させたいと自己追求が生まれる。所属したグループでは互いに切磋琢磨し合いスキル向上に努め、グループ内での共創が行われる。「もっと上手になりたい」という意欲が起きる。

そこに発表や勝敗など「技術向上や努力が確認できる成果」を伴うことでグループと個人個人の努力も評価され、聴衆や、地域など対外的にも価値共創が生まれる。この価値共創はグループ内のモチベーションをさらに上げ、「次の新しいことに挑戦」と再び個人のモチベーションを高め“生きがいの場”として QOL 向上に結びつく。QOL の向上は再びモチベーションとなり、持続的活動へのスパイラルとなっている。

このスパイラルには、参加者個人のスキルを指導者と共に支え、場の環境維持に尽力するまとめ役として、メディエーターの存在が重要である。メディエーター自身も活動に参加しながらマネジメントを行うことで成長し、参加者からのフィードバックを自分のモチベーションとして満足感を次の集まりへと活かす。

持続・活性化している活動を行う“生きがいの場”では、個人・グループが共通目標のためにスキルを切磋琢磨させ、メディエーターが良好な場のマネジメントを行う。

「指導者」「まとめ役」と「参加者」の3者の間にはActor to Actor「互助」としてのサービスが行われており、再び個人のQOL向上・生きがいに寄与し、次回参加へのモチベーションとしていた。

これが本研究で得た「価値共創モデル」である。

5.2 研究の含意

5.2.1 理論的含意

日本人の平均寿命が80才を超える現在、介護を伴わない「元気な前期高齢者」に対して健康で生きがいを持って過ごす研究、及び価値共創モデルの研究は、これまで行われていなかった。

本研究では、参加者・指導者・まとめ役3者の価値共創と、活動成果を表彰または発表することにより活動が持続的かつ活性化する価値共創モデルを提案した。

図 5-1 に示す。

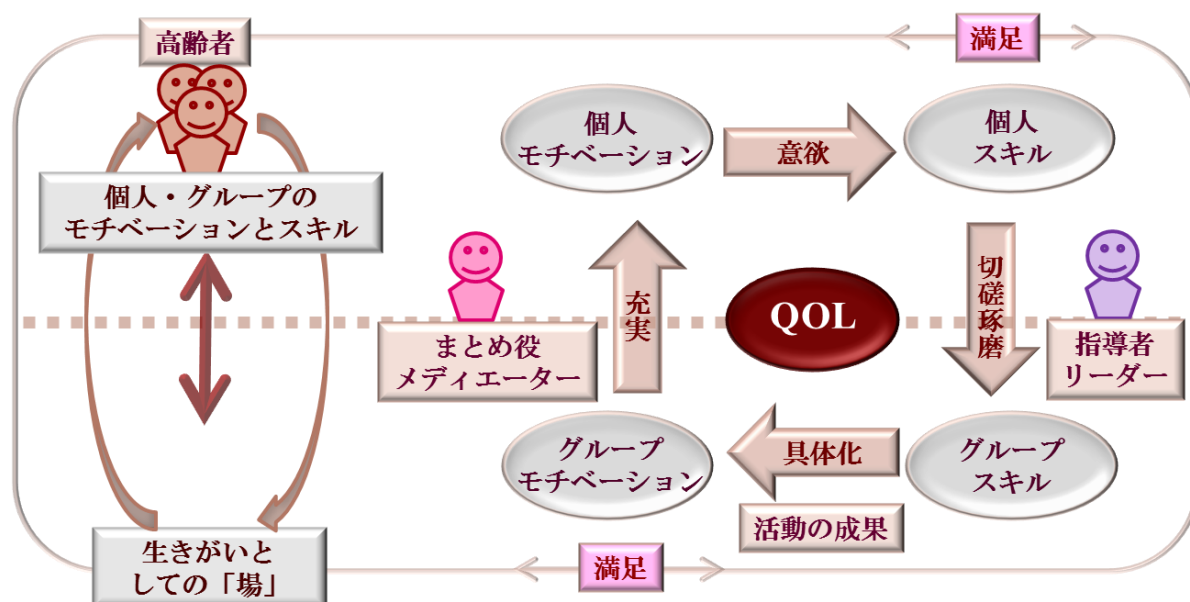


図 5-1 価値共創モデル

5.2.2 実務的含意

高齢者が健康で生きがいを持ち、それぞれの持つ能力を活かし、持続的かつ活性化する活動を行うことは介護予防へつながる。本研究では、まだ介護を必要としない元気な前期高齢者が生きがいを持ち、活性化することを目的としているが、今回の4事例では若年期から継続して様々な備えをしていた元気な後期高齢者が、リーダー側にも参加者にも見られ、意欲的に活動を行っていた。

本研究で得られた価値共創モデルは、高齢者の様々な社会活動・コミュニティ活動において、健康で生き生きと過ごすための1つの示唆と成る。高齢者の技術向上意欲が高いことから、それぞれの地域において持続的かつ活性化するコミュニティ活動へとつながる働きかけが必要である。

5.3 将来研究への示唆

今後予測される超高齢化社会において、前期高齢者がより健康に、生きがいを持って過ごすための活性化促進が必要であるが、多くの社会活動は地域単位の活動に細かく分かれており、高齢者自身がリーダー・メディエーターとなる研究が少ない。このことから、今後継続してより多くの事例検証を行うことが必要である。

また、グループの共通成果を伴うものについて、大きく「表彰」「発表」の2つに分類したが、ますます多様化する社会において、今後もより多くの事例検証によって、研究を進める必要がある。

5.4 結語

アマチュアオーケストラの活動は、若年期から社会活動・技術に対して十分に備えができているという点で、活性化モデル作りの基盤とした。高校の部活動などでのきっかけから、大学オケに入り、たまにはOBと共に多くの世代の中で活動を行う。仕事が忙しい世代で中断しても、様々な世代とのネットワークがすでに築かれているため、リタイア後の活動が再開しやすい。

しかし高齢者の活動を分析して、その他の活動においても予想以上に「技術向上心」が高いことがわかった。理由の1つとして、若い世代とは異なり、人生経験の長さ・豊かさから自らの目標が設定しやすいことが挙げられる。現在高齢者の参加できる活動には多くの種類があり、個人の持つ能力を活用し、モチベーションを持つことができる活動への参加を自由に選択できるということもある。

個人が高齢者の世代となり、仕事などの面において自らの生活の時間に余裕ができた時、人生をより豊かに、心身ともに健康で生き生きと過ごしたいと願う。心身の健康維持には「生きがい」を持ち、参加できる「場」が大事である。そのため、その中では、自身の知識を増やしスキルを向上させたいと願う。

活動に発表・勝負を伴うと「技術向上の成果」が見える形となり、努力が報われる。その充実感から得たQOLの向上は生きがいとなって再び個人のモチベーションとなり、

“生きがいの場”として持続・活性化する活動へのスパイラルとなっている。このスパイラルを支えるために、技術面での指導者と、参加者側から場のマネジメントを行うメディエーターが重要な位置付けとしてあった。

今回の A 町・B 町・C 区の事例 3 つは、個人モチベーションとスキルがチーム内での共創を得て、グループのスキルとモチベーションへと繋がることで、アマチュアオーケストラの活動分析から得た「価値共創モデル」にあてはまっていたが、高齢者の活動形態は、必ずしもグループとしてまとまり、団体としてのスキルを上げるケースばかりではない。釣りや絵画などのように個人のみでスパイラルが完結するものもある。個人が元気で楽しく過ごすためにモチベーションを持って「行動」を起こす。活動に応じて、そのスキルを向上しようという「自己追求」が生まれる。スキルの向上を感じられることは、個人の「充実感」となり、再び個人のモチベーションが起こる。そこに持続・活性化を感じるためには、例えば釣りであれば釣り仲間との釣果の話や食事として周囲への提供を行うなど、周囲からの評価が伴うことが考えられる。そうになるとコミュニケーションが共創となり、個人の充実が得られる。

B 町地区交流センター設立直後から参加している T 氏（82 歳）は、健康で非常に強い意志を持つ。個人で毎日欠かさずに山歩き・スイミング 400 メートル、マシントレーニングや柔軟など体力作りに 1 日の大半を使い努力を続けているという、驚くほど自己効力感の強い女性である。しかし 1 人でトレーニングを続けているだけではないと、自ら「コミュニケーションのため」交流センターに 12 年参加を続けている。他の参加者と比べても抜き出て健康であり、技術も体力も優れているため「もっと難しいものにも挑戦したい」という希望もあるというが、この交流センターを生きがいとして休まずに通い続け、餅つきでは優秀な捏ね手として活躍、ゲーム大会でも上位を狙って壁新聞の写真におさまる。この T 氏の行動からは、「社会活動の大事さ」をうかがうことができる。

C 区歌声サロンは着席したまま活動できることから、健康で生き生きとした参加者だけが集まっているわけではなく、「病気の克服後」からの参加者も少なからずいた。開始当時は、自身の健康不安の面で、活動が続けられるであろうか、と指導者に相談する姿が見られていた。しかし、特養での発表当日・発表の後からは、参加者の表情・

活気が目に見えて感じられるようになった。サロンは月に1度だが、他の健康講座や区の行事でも「歌声サロンのグループ」として初対面から仲間へと、関係が広がってきた。休憩時間にはこれまでの友人との席から移動して、思わぬ参加者同士が熱心に話し込んでいる、という姿も見られるようになった。

「発表の場」や、「勝敗の場」はグループの共通目標、成果となり、個人が活動しようというモチベーションに大きく寄与する。目標が設定されると、切磋琢磨しながら個人とグループのスキル向上となる。そこに参加者個人のスキルを指導者と共に支え、参加者の立場から良好な場の環境維持へと、マネジメントを行うメディエーターの存在があってこそ、団体としてのまとまり・モチベーションも生まれ、持続・活性化した社会活動が行える。メディエーターは参加者自身のQOL向上にも寄与し「また必ず来よう」というモチベーションを起こさせる。メディエーター自身もまた“生きがいの場”によって成長し、スキルが向上する。そして自らも楽しくあることを常に心掛け、参加者からのフィードバックを自分のモチベーションとして満足感を次の集まりへと活かし、再び参加者自身のモチベーションにも寄与していた。

高齢者がモチベーションを持ち「参加できる場」として持続・活性化しているコミュニティの共通点は、「メディエーターとしてのまとめ役」「指導者」「参加者」の3者間にActor to Actor「互助」としてのサービスが確立し、持続・活性化する“生きがいの場”で継続的な「価値共創」を行っていることであつた。

参 考 文 献

- 安藤哲朗(2011)「教育講演 1 明日から役立つ医療安全 神経内科診療に役立つメディエーションモデル」『臨床神経学』 51.11 : 827-829.
- 藤井美和(2000)「病む人のクオリティーオブライフとスピリチュアリティ」『関西学院大学社会学部紀要』 85 : 33-42.
- 福島真人(2010)「知識移転の神話と現実: バイオ系ラボでの観察から (〈特集〉知識伝承システムの多様な次元)」『研究技術計画』 24.2 : 163-171.
- フランク・ゴープル, 小口忠彦監訳(1972)『マズローの心理学』産業能率大学出版部
- 池島徳大, et al. (2013)「あいさつ・頼み方・もめごと解決スキルトレーニングの学級への導入とその効果に関する研究-多層ベースラインデザインを用いて」
- 石谷治寛(2015)「アートの創造性を公共に媒介する: セラピストとメディエーター (2013 年研究会報告 アート× ナラティブ× 災害トラウマ: 記憶の紡ぎ手の役割を考える)」『心の危機と臨床の知』 16 : 73-84.
- 神谷美恵子(2004)「生きがいについて」みすず書房 (初版 1966 同社刊)
- 神田信彦(2011)「生きがい考 (1)―明治時代から太平洋戦争終結までの生きがいの扱われ方―」『生活科学研究』 33 : 111-122.
- 小玉敏江, 森千鶴, and 佐藤みつ子(2009)「老人クラブの高齢者における世話役の特性」『日本保健福祉学会誌』 15.2 : 1-11.
- 小坂満隆(2012)「サービス志向への変革 - 顧客価値創造を追求する情報ビジネスの展開」『社会評論社』
- 厚生労働省 「地域における医療及び介護の総合的な確保を推進するための関係法律の整備等に関する法律案 (平成26年2月12日提出)」
- <http://www.mhlw.go.jp/topics/bukyoku/soumu/houritu/186.html>

厚生労働省「地域包括ケアシステム」

http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/index.html

Lusch, Robert F., and Stephen L. Vargo. (2014) *Service-dominant logic: Premises, perspectives, possibilities*. New York: Cambridge University Press,

A. H. マズロー著, 小口忠彦訳(1987)『[改訂新版]人間性の心理学 モチベーションとパーソナリティ』産業能率大学出版部

文部科学省（平成 24 年）「超高齢社会における生涯学習の在り方に関する検討会」
資料 2 長寿社会における生涯学習の在り方について（素案）

http://www.mext.go.jp/a_menu/ikusei/koureisha/1317565.htm

森常人(2014) “「ふれあい・いきいきサロン」の参加者評価の分析に関する一考察”
『研究論集』100：257-270.

内閣府（平成 24 年）「高齢社会対策大綱」社会参加・学習等分野に係る基本的施策

<http://www8.cao.go.jp/kourei/measure/taikou/h24/2-3.html>

内閣府（平成 26 年版）「高齢社会白書」社会参加に関する備え

http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2014/gaiyou/sl_3_3.html

中西仁美, and 土井健司(2003)「QOL に関する概念整理ー 政策評価やベンチマークシステムとの関連性からー」『土木計画学研究・講演集 (CD-ROM)』27

公益財団法人 年金シニアプラン総合研究機構(2013)「サラリーマンの生活と生きがいに関する研究～過去 20 年の変化を追って～」107, 125

西島千尋(2013)「アメリカにおけるパフォーマンスアーツの習得過程に関する比較研究」『金沢大学文化資源学研究= Kanazawa cultural resource studies』12：106-116.

野中郁次郎, and 竹内弘高 (1996)『知識創造企業』東洋経済新報社

長田久雄, et al. (2010)「高齢者の社会的活動と関連要因 シルバー人材センターおよび老人クラブの登録者を対象として」『日本公衆衛生雑誌』57.4：279-290.

尾崎章子, et al. (2003)「百寿者の Quality of Life 維持とその関連要因」『日本公衆衛生雑誌』50.8：697-712.

マイケル・ポラニー, 佐藤敬三訳(1980)『暗黙知の次元』紀伊國屋書店

- 佐々木英和(1996)「生涯学習実践の学習課題に関する理論的考察：AH マズローの欲求理論の批判的継承を軸として」
- 下妻晃二郎(2008)主催，脳脊髄腫瘍科，and 臨床腫瘍科「医療における健康アウトカム評価-意義，現状と課題」『埼玉医科大学雑誌』35. 1.
- 高野和良，坂本俊彦，and 大倉福恵(2007)「高齢者の社会参加と住民組織：ふれあい・いきいきサロン活動に注目して」『山口県立大学大学院論集』8：129-137.
- 武脇誠(2011)「グループ・ベース業績給有効性のメカニズムの研究」『東京経大学会誌. 経営学』270：51-62.
- 上田奏(2003)『組織行動研究の展開』白桃書房
- 梅本勝博(2012)「ナレッジマネジメント：最近の理解と動向」
- 渡辺惺之(2013)「ドイツにおける子の返還事件に関するメディエーションの実務並びに裁判との連携」
- 山岸淳子(2013)『ドラッカーとオーケストラの組織論』PHP 新書
- 山下昭美，et al. (1989) “老人の「生きがい感」について 在宅老人とホーム老人との比較”『生活衛生』33. 3：126-135.

発 表 論 文

- [1] 藤井美樹, 小坂満隆, アマチュアオーケストラにおける高齢演奏家の価値共創に関する一考察, 第5回横幹連合総合シンポジウム, 東京大学・本郷キャンパス, 11月29, 30日, 2014.
- [2] 藤井美樹, 小坂満隆, 高齢者の活性化を促進する価値共創モデルの提案, 2015年度サービス学会 第3回 国内大会, 石川県金沢市 金沢歌劇座, 4月8, 9日, 2015.

資 料

[1] 2014 年 6 月実施 J 管弦楽団調査票

以下についてお伺いいたします。

1. 年齢 ・ 20 代 ・ 30 代 ・ 40 代 ・ 50 代 ・ 60 代 ・ 70 代 ・ 80 代
2. ・ 男性 ・ 女性
3. これまでに習得された楽器（声楽を含む）と習得年数・習得時期をお書きください。
(年頃年間)
(年頃年間)
4. 3 でお答えになった楽器は、現在のオーケストラのパートですか？
・ はい ・ いいえ
5. J 管弦楽団に入った時期はいつですか？ (年頃)
6. J 管弦楽団に入った理由で最も近いものを 1 つ、記号で記入して下さい。
a. 知人に誘われて b. 音楽技術の向上 c. コミュニケーション d. 生活を豊かにする
e. ホールで演奏できる f. その他 ()
7. クラシックの音楽会を聴きに出かける頻度について伺います。
(J 管弦楽団に参加する前 1 年間に 回位)
(J 管弦楽団に参加した後 1 年間に 回位)

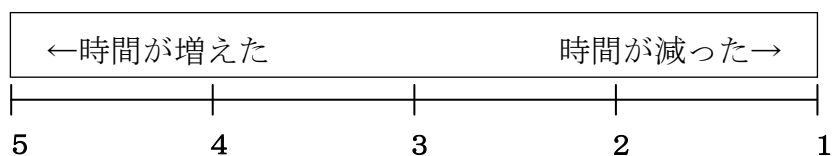
8. オーケストラ以外で最もよく出かけるものは何ですか? 例; オペラ・美術館

(_____)

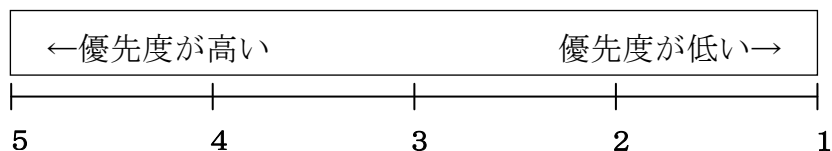
個人のスキル・モチベーション、オーケストラ全体としてのスキル・モチベーションについて、ご自身のお考えを伺います。

※当てはまる数字の上に○をつけて下さい。数字の間は用いず 5～1 は等間隔です。

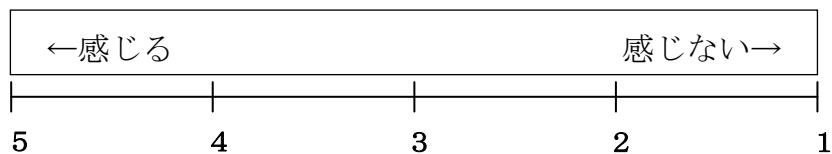
9. J 管弦楽団に参加してから、楽器の練習時間は増えましたか?



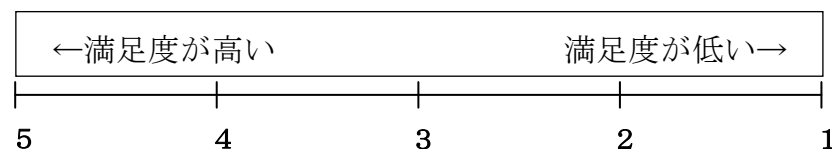
10. 生活の中でオーケストラに参加するプライオリティ（優先度）はどの位ですか?



11. オーケストラに参加して生活にハリが出ましたか?



12. 今シーズンの定期演奏会は、あなたにとって満足いくものでしたか?



13. 問12の理由は何ですか? ご自由にお書きください 例; 聴衆の様子

(_____)

1 4. オーケストラの活動で、ご自身にとって重要と思う度合をお答えください。

	←重要度が高い 重要度が低い→				
a. 楽器含む音楽の技術向上	5	4	3	2	1
b. 団員・指揮者との コミュニケーション	5	4	3	2	1
c. 団員・指揮者との一体感 (練習や本番の演奏で)	5	4	3	2	1
d. 聴き手との一体感 (演奏会の会場で)	5	4	3	2	1

1 5. 問 1 4 の a から d の項目を、ご自身の優先度が高い順に記号でお答え下さい。

abcd の記号を枠にご記入下さい

←優先度が高い項目		優先度が低い項目→	
1	2	3	4

1 6. J 管弦樂團のようなアマチュア音楽活動が更に盛んになるためには、どのようなことが必要と思われますか？ ご自由にお書きください。